

マツダ財団支援

市民活動報告書

第33回（2017年度）

も く じ

1. 活動報告書

ページ

No.	活動名	団体名	地域	
1	ここまで出来たよ「くるりん村」！！	ふるさと宮園ビオトープの会	広島県 廿日市市	1
2	河川敷の整備とサマースクール	江の川流域里川エコネット	広島県 三次市	3
3	ワクワク森林資源再生プロジェクト。	特定非営利活動法人 やまおこしの会	広島県 山県郡	5
4	子どもたちへの伝統芸能の継承活動	神村学区郷土芸能保存会	広島県 福山市	7
5	永田川流域（森・里・川・海）の環境保全・整備プロジェクト 2017	永田川カエル倶楽部	広島県 江田島市	9
6	ぼくたちの道しるべ～違っているでもいいんだよ～ 自閉症スペクトラムの子どもの得意を生かす子育て【家庭療育を 進めるプロジェクト】	発達障害親の会 ＊PEACCH＊	広島県 広島市	11
7	青少年の非行・再非行防止による健全育成活動	特定非営利活動法人 食べて語ろう会	広島県 広島市	13
8	「地域全体で子育て・親育ち応援！！」 ～地元を愛し、お互いに元気になろう～	府中町家庭教育支援チーム「くすの き」	広島県 安芸郡	15
9	棚田開墾モリモリツアー（日帰りお楽しみ編）	棚田開墾モリモリ倶楽部	広島県 安芸高田市	17
10	美鈴恵みの森づくりボランティア	美鈴恵みの森づくりボランティア	広島県 広島市	19
11	みんなで創り広げる「オルゴールシアター広島・山口の民話」プ ロジェクト	多世代交流支援 オルゴールシアター実行委員会	広島県 東広島市	21
12	次世代リーダー育成「将来の夢を描くドリームマップ」を作ろ う！in HIROSHIMA	一般社団法人 ひろしまドリームマップ協会	広島県 広島市	23
13	原南生き物ふれあい活動	原南学区青少年健全育成連絡協議会	広島県 広島市	25
14	ホテルと花と砂留と	堂々川ホテル同好会	広島県 福山市	27
15	教えて！赤ちゃん先生 ～わたしもあなたも大事な命～	ママの働き方応援隊 広島東校	広島県 安芸郡	29
16	若者と高齢者が共生する街づくり活動	鞆の浦の共生を実行する会	広島県 福山市	31
17	しごとしつとこU18	NPO子どものひろばヤッチャル	広島県 東広島市	33
18	地域の誰もが集える場～ひねもすようこそ～	ひねもすようこそ	広島県 広島市	35
19	江田島を基点としたアートと哲学による青少年育成	ELCAP(エルカップ：Etajima Local Culture Art Philosophy)	広島県 福山市	37
20	『親子で体験！五感で実感！大きな発見』宮島の自然と環境を楽 しもう！ & 大学生ボランティア育成事業	みやじま未来ミーティング	広島県 広島市	39
21	絵本と紙芝居の地域文庫	絵本と紙芝居の地域文庫	広島県 広島市	41
22	広島県居住の外国人に対する日本語学習機会の提供と異文化理解 を深める交流	日本語教室ピース	広島県 東広島市	43
23	広島と石巻の被災地を結ぶ学生ボランティア交流会 （災害の教訓を伝承する活動を通して）	高校生災害復興支援ボランティア派 遣隊	広島県 広島市	45
24	出前絵本たねまき広場	絵本たねまき塾	広島県 広島市	47
25	子ども時代をもっと楽しむ体験づくり	岩国市立通津小学校おやじの会	山口県 岩国市	49
26	東滝の謎に迫る！ ～わが町に「ため池」はあるのか？～	滝びとの会	山口県 山口市	51
27	下三原上神楽舞伝承子どもプロジェクト	下三原上神楽舞伝承活動実行委員会	山口県 萩市	53
28	「につぼんのこころ」を育む宿泊型青少年開発事業	公益社団法人 防府青年会議所	山口県 防府市	55
29	板三夏祭り&板三もちつき大会&子供会と敬老会のコラボ	板持3区自治会	山口県 長門市	57
30	創作神楽による青少年健全育成	創作・風鎮神楽会	山口県 防府市	59
31	神楽ふれあい教室	特定非営利活動法人 まなびデザインラボ	山口県 周南市	61

2. 贈呈式

3. 応募&採択に関するデータ

63

64

活 動 名	No.1	団 体 名	ふるさと宮園ビオトープの会
こここまで出来たよ「くるりん村」!!		地 域	広島県廿日市市
		代 表 者	会長 楠木 仁義
		支援金額	12 万円
活動概要	ピオトープ、愛称「くるりん村」づくりに着手して 13 年が経過しました。今では、色々な生きものや、植物が 200 以上融けあったピオトープとして成長しております。森や小川、三つの池などの維持管理の活用の為のノウハウを後継者に残すための資料として、読み物的なものを作成しました。 ようこそ くるりん村「こここまでて来たよくるりん村」冊子 100 冊		



今回作成した冊子(上)と昨年度作成の「くるりん村の植物」



宮園小学校校庭の中のピオトープ活動場所(くるりん村)



「ピオトープ紙芝居」上映風景



昨年度末三年生の「感謝の会」で貰った手作りの感謝状

◆実施に伴う効果

◆苦勞した点

当会の活動は原則毎週土曜日の午前中、くるりん村の維持管理(里山の維持・水源の確保・小さな畑の耕作等)と、子どもたちの授業のサポート(ビオトープ内の生きもの、植物の観察会・サツマ芋等の植付けから、収穫)です。例年 70 から 80 回程度を会員延べ人数で 500 人程度で活動しております。大雨の後の水源地の砂上げとか、畑の耕作等、会員が高齢となり、鍬を扱える人数が少なくなり会員募集につながれば幸いです。

◆今後の課題・発展の方向性

ふるさと宮園ビオトープの会の活動場所「くるりん村内」での年間活動計画はほぼ固まってきました。毎週土曜日のくるりん村の里山維持管理は会員各自のペースに合わせ進めています。その中で梅雨時期から、台風等の大雨の後、水源、地に山からの砂が流れ込み、ピオトープのせせらぎ川から三つの池が枯渇すると、多くの生きものに支障がでできます。水源地の砂撤去や、学校の授業支援の畑の耕作など、重労働となり、会員も高齢化が進み、将来を思うと早期に後継者を取り込む必要があると考えています。

◆活動を終えての感想・意見等

会員の後継者取り込みで今年度は地域の皆さま方へ広く、会員募集の広報をしております。学校を通じて保護者 PTA 総会や、宮園地区連合会・コミュニティー協議会総会や、宮園市民センターが発行している広報誌などをお願いしております。その広報活動で今回の 5 年間の活動内容がよく分かる『ここまで出来たよ「くるりん村」冊子を配布しております。もちろん公益財団法人マツダ財団の支援を受けて発刊できました。と配布しております。そのせいか、学校の支援活動で児童保護者の参加が多くなった気が致します。

活 動 名	No.2	団 体 名	江の川流域里川エコネット
河川敷の整備とサマースクール		地 域	広島県三次市
		代 表 者	会長 熊澤 博
		支援金額	35 万円
活動概要	1、江の川流域環境情報誌「里川エコネット」の発行（4月・7月・10月2月予定） 2、水辺の楽校周辺の環境整備（ふるさとの小川づくり）（5月～8月） 3、自然観察会 （ ①春（野鳥）②夏（水生生物・魚）③秋（水辺の植物）④冬（野鳥）（予定） 4、サマースクール 5、他団体との連携事業 ①里川復活祭夏イベント（8月） 馬洗川いかだ下り（八次～鶴飼乗船場） 連携団体「江の川かっぱ道場」「江の川漁業協同組合」「三次鶴飼鶴匠船頭会」 ②里川復活祭冬イベント（12月） 「県立歴史民俗資料館」「江の川水系漁撈文化研究会」他		



スポッティングスコープをのぞいて、スズメの顔を確かめました。



網を使って魚をとることは多くの子どもが初体験でした。



8月9・10日、朝勉強・ピクトープ・石磨き・水遊びと大忙しでした。



45名の子どもたちが、約3キロをいかで下りました。

◆実施に伴う効果

- ① 「里山」「里海」が学術用語として確立し、日常の生活用語として使われているのに対し、「里川」という言葉はまだ一般的には使われていません。里山や里海が「人々にとっての身近な生活の山・海」という意味を持つのなら、「川」もまた「里川」です。こうした願いを込めて「里川エコネット」を設立しました。背景には川が年々人々から遠くなり、魚をはじめ水辺にかかわる生物が少なくなっていることがあります。
- ② マツダ財団からの助成をいただいて重点を置いたのは次の2点です。「江の川環境の現状を市民に伝える情報誌の発行」と子どもたちに川の魅力を伝え、『「兎追いしかの山、小鮒釣りしかの川」を次の世代に渡したい」です。

◆苦勞した点

① 川は誰のものか

山野は個人所有であるが、川の管理者は国（国土交通省）であるから、基本的には個人が自由に利用することは出来ない。特に近年は治水・防災の河川行政、膨張を続ける都市の水需要にこたえるための水利水政策が優先されるので、「川の生き物にやさしい川」「人々の日常生活に直結する川」「ふるさと景観としての川」という環境面からの視点は弱く、「人と川」の関係は遠くなる一方である。今後、積極的に行政との連携を深め、官民が一体となって「川は誰のものか」を考える機会を増やしていきたい。

② 外部へのPR、啓発・研修、地域への働きかけ

里川情報誌は年間4回の発行を行った。チラシ・情報誌氾濫の中での発行であるが、「親しめるもの」「子どもたちにも読んでもらえるもの」ということでA版8ページ・カラーで団体購読5000円、個人購読1000円で発行した。業者印刷は発行費がかなりかさむので今後検討しなければならないが、市民サイドの里川環境情報誌としての個性は維持したい。

◆今後の課題・発展の方向性

- ① 江の川流域の川にかかわる行政機関・河川漁業団体・伝統文化団体とのネットワークが出来たが、今後、どう市民運動として持続、発展させるかという大きな課題がある。
- ② 鳥類保護連盟・野鳥の会・里山研究会等と連携して小さな研究会・研修会を定着させたい。
- ③ 流域の小学校と連携した各地域の自然観察会・フィールドワーク等の出前講座を企画したい。
- ④ 里川復活祭を「川の祭り」として地域に定着させたい。
- ⑤ 「里山資本主義」の著者藻谷浩介氏・NHK エンタープライズのプロデューサー井上恭介氏との継続的な調査と協力関係を持続したい。

◆活動を終えての感想・意見等

- ① 設立初年度なので、前年度との比較はできないが、三次市を中心に江の川上流域一体で「里川」という言葉が川の関係者（河川行政・漁撈者・まちづくり団体等）の間に少しずつ定着してきだした。新聞・テレビ等でも「里川」についての論評もされるようになりました。
- ② 連携団体（かっぱ道場江の川・灰塚ダムウエットランド・県立歴史民俗資料館・江の川漁協等の活動が「里川」のキーワードで連携が深まり活動も活発になりました。
- ③ 「里山資本主義」一角川新書ーの著者藻谷浩介氏や「里海資本論」の著者でNHKエンタープライズのプロデューサー井上恭介氏も「里川」に着目し12月の里川復活祭に参加されました。
- ③ 貴財団の支援のお蔭でA4版カラー8ページの発行が出来、多くの人に「里川」の意義について理解していただくことが出来ました。出来るだけ「自主運営を」と願っています。

活 動 名	No.3	団 体 名	特定非営利活動法人やまおこしの会
ワクワク森林資源再生プロジェクト		地 域	広島県山県郡
		代 表 者	理事長 丸山 帝治
		支援金額	35 万円
活動概要	安芸太田町は、町面積の 90%を森林が占めている自然そのままの町です。古くは山林の資源を活かした暮らしが地域を支えていました。しかしながら今日の生活スタイルは大きく変わり高齢化と過疎化の先頭を走っている。 そこで、地域の森林資源を再生し、その魅力を体験教育を通じてこれからの町の活力を取り戻します。具体的には、広葉樹を活用した「炭窯・植樹等」体験を通して青少年育成を図り、都市部と交流することで持続可能な街まちづくりを目指します。 活動内容 1) 修学旅行の民泊生徒との自然体験学習 2) 地域住民の皆さんとの森林資源再生学習 3) 木材の活用事業の復活（炭・薪・木材製品・植樹等）		



炭窯をバックに泊体験学習の参加者と記念写真



薪割り体験(機械にて)



薪割り体験(斧にて)



竹細工でマイ箸づくり

◆実施に伴う効果

- 1) 自然体験学習地が民泊生（修学旅行生）の体験学習場として活用された－佐賀県の中学校生徒
- 2) 地元の子供さんに森ダムの働きをモデルで示した結果、災害が起こらない落葉樹の役割が理解できた。（2本の竹の樋をスポンジの有り無しによる水の出方の違い着目し、その意味を考えてもらった。）
- 3) 安芸太田町の技術伝承に炭窯の仕組みが分かる学習の場として議会広報班により取材される。
- 4) 地域の特産品である赤松を活かした「たたら炭」・「陶芸の薪」の需要が発生した。
- 5) 子供さんの遊びの環境に「里山斜面」「自然河川」「体験学習広場」等が集合しているため、子供達が仲間と自由闊達な遊びとして体験してもらった。又、それを見た親も学ぶものあり「今後も継続してください」との声あり。

◆苦労した点

- 1) 予算不足
予算が少ないため、体験に必要な設備（炭窯、薪割り機、暖炉、トイレ、工具等）が揃えにくかったが、地域の企業の協力等でレンタル等で何とか実施できた。
- 2) 外部へのPR
地域の方達へのPR周知期間がなかったため準備品に苦労した。
- 3) 地域の理解度
炭窯体験と言っても、地域住民には炭・薪への新鮮さ話題に盛り上がりがないため、まず都心部の方達に森の魅力を知って頂く事から地元の方のその必要性を理解して頂くに時間を要する。
- 4) 炭窯の職人確保
昔は、麓の山のあちこちで炭窯の煙を多く見ることがあったが、現在では炭窯を体験した方がいなくなっていたが、当炭窯を使っていた職人さんが居られたのでその方の指導の下で何とか炭焼き技実を伝承していただく事となる。

◆今後の課題・発展の方向性

＜今後の課題＞

- 1) 予算の確保－NP0 法人の運営費の原資は、会費がベースでは管理運営が出来ないため何らかの収益活動をしなければならないが、まだその固定事業がないため補助金に頼らなければならない。
- 2) 炭窯の職人の継承－広く求人を行い、自立運営できる市場を定着させる必要がある。
- 3) 学習体験顧客の確保－都市部の学習企業との連携で年間安定的顧客を取る。

＜発展の方向性＞

- 1) 将来は、青年の体験学習が地域の森の資源を活かした職・住・育を当地域で根差してもらえる町を期待する。
- 2) 森の学習園として多くの方が訪れて、地元の食・観光・住民との交流が地域経済に寄与する町を期待する。
- 3) 森からの贈り物である木材の新製品を等町で加工販売し地域産業として再生することを期待する。

◆活動を終えての感想・意見等

地域の魅力を活かした活動の場が形成されたことで、今後はより魅力ある場、より多くの利用客が訪れられ、又、地域に密着した活動が定着するようその協力者の拡大を図ります。

活 動 名	No.4	団 体 名	神村学区郷土芸能保存会
子どもたちへの伝統芸能の継承活動		地 域	広島県福山市
		代 表 者	会長 平 勝義
		支援金額	25 万円
活動概要	地域の伝統芸能である虫送り「銅鉦おどり」を次世代に継承していくために、郷土芸能保存会を中心として、神村小学校との連携により、5 年生 61 人を学校の総合学習に組み入れて児童に伝承していく。 将来にわたって地域の伝統芸能の担い手として動機づけを持たせ、また、地域文化の伝承事業として、子どもたちの故郷への愛着と誇りを育むこととする。 今後、より充実した活動を継続するために用具(小太鼓)を新調するものです。		



2017年11月14日 予行演習



マツダ財団助成金により購入した小太鼓とバチ



2017年11月14日 予行演習



練習風景

◆実施に伴う効果

学習発表会には、保護者、主催団体は勿論、福山市の地域振興課からも来場され、市のイベントにも是非出場してほしいと依頼があった

◆苦勞した点

- ・ 児童が虫送りを学習することは、学区民からも高い評価を得ています。
- ・ 地域の神社で奉納するときは、各地区とも若者がたくさんいます。
- ・ 学校の総合学習時間が、13:45 から 15:00 の時間帯のため、指導者(高齢者)で対応しています。

◆今後の課題・発展の方向性

- ・ 基本的には、今年度を踏襲していきます。
- ・ 各地域で借用する小太鼓に損傷等が発生し、その対応に苦慮しています。
- ・ 次年度は、児童数 70 人と増加します。用具の確保に苦慮します。
- ・ 学校の方針(総合学習時間の確保)

◆活動を終えての感想・意見等

- ・ 今年の学習発表会は、大変好評でした。
- ・ マツダ財団の助成金で小太鼓 3 個購入、予算・学習面で大変助かりました。
- ・ 次年度も継承していきます。

活 動 名	No.5	団 体 名	永田川カエル倶楽部
永田川流域(森・里・川・海)の環境保全・整備プロジェクト 2017		地 域	広島県江田島市
		代 表 者	事務長兼会長 池田 朝雄
		支援金額	10 万円
活動概要	① 森：真道山林道と野登呂山林道の清掃活動と自然観察 ② 里：永田川沿いの国道 487 号と市道鹿川 20 号線の清掃美化活動及び 永田川河口干潟沿道の市道鹿川～岡大王線の清掃活動 ③ 川：永田川の清掃活動、水質調査、水生生物調査、水生生物生息環境の創造 絶滅危惧種二ホンウナギの保護活動開始 ④ 海：永田川河口干潟の清掃活動、干潟のアマモ・コアマモ調査と保護活動 木海岸の清掃活動兼漂着物調査		



森での活動



里(道路)での活動



川(永田川)でのアダプト活動



永田川河口干潟調査

◆実施に伴う効果

2017年度の活動で、絶滅危惧種二ホンウナギの餌・棲家が減少していることが明確になったので、10年計画で保護活動に重点を置くことにしました。

◆苦勞した点

活動の基本的な考えとして、楽しく、遊びながら自然に触れることにしているので、人、物、金は、現状をよしとして活動しているので、苦勞はありません。楽しく、子ども達や、保護者と活動しています。

子ども達に、公的な表彰体験（＝活動の成果）をさせてやりたいので、表彰の応募をしています。

◆今後の課題・発展の方向性

絶滅危惧種二ホンウナギの保護活動がうまくいって、永田川にウナギが多く生息するように、生息環境の創造を河川管理者と協議しつつ実施していきます。

50年前のようにウナギがうじゃうじゃ生息するまでにはいかなないと考えますが、安定して生息確認ができる河川環境を創造します。

そのためには、餌のスジエビなどの水生生物が多く生息する割栗石等で多孔性生息空間を5年計画で創造します。

◆活動を終えての感想・意見等

マツダ財団支援金と公益財団法人自然保護協会の「うなぎ目線で川・海しらべ！」で、「絶滅危惧種二ホンウナギの保護活動」といった重点目標ができました。

楽しく、目標達成のために“永田川流域の森・里・川・海の環境保全・再生活動”を地域の子どもの達や孫たちと継続します。

活 動 名	No.6	団 体 名	発達障害親の会*PEACCH*
ぼくたちの道しるべ～違っていてもいいんだよ～ 自閉症スペクトラムの子どもの得意を生かす子 育て【家庭療育を進めるプロジェクト】		地 域	広島県広島市
		代 表 者	代表 唐内 愛
		支援金額	30 万円
活動概要	自閉症スペクトラムの子どもたち、またその家族・保護者の支援を目的とした活動を年間を通して定期開催した。 ●親子活動・月1回（音楽療法、買い物活動、造形活動、クッキング活動） ●保護者交流会・月1回（保護者同士の交流、意見交換、勉強会） これらの活動により、保護者には、自閉症スペクトラムの子どもたちの抱える困難さの背景を考え、どの様に支援したら良いかを学んだ。また、子どもとの関わり方や生活上の様々な工夫を学び、それらの情報を共有する場を設けた。 全ての活動において、子どもの得意な事や特性を活かし、将来を見据えた支援をする視点を保護者が学び実践し、子どもたちの自己肯定感を育てることに力を入れた。最終的には、子どもたちが、定型発達のお子さんとの違いを優劣ではないことと理解し、「工夫すれば自分ではできるんだ」とポジティブに捉えて成長していく～道しるべになるような支援～を共有していくことを目的とし、活動した。		



ペアレント・トレーニング修了式の様子



角野先生講演会の様子



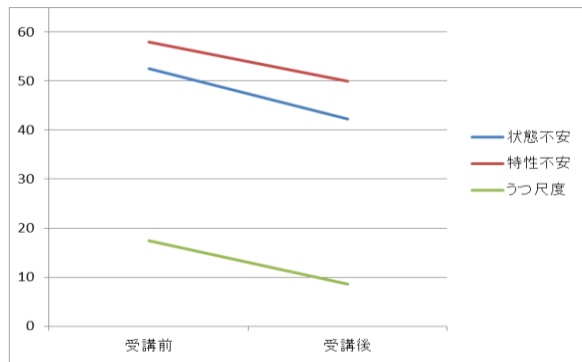
親子活動での音楽療法の様子



親子活動で保田窯(黒瀬)にて作陶体験をした時の様子

◆実施に伴う効果

【ペアレント・トレーニングの効果】



＜特性不安＞

その人がもともと持っている不安の傾向

＜状態不安＞

ある状況や出来事による不安

＜うつつ尺度＞

高いほううつ傾向がある

今年度は講師の先生のご指導のもと、受講者にトレーニング開始前・後で心理状態のアンケートを採った。ペアレント・トレーニングはエビデンスに則ったプログラムであり、従来より効果には定評があったが、当会での実施においても上図の様な数値結果となった。

【親子活動の効果】

- ・ 会独自に保護者アンケートを採った。（4月活動開始前・3月全活動終了後の2回）
- ・ 内容は、14項目（育児に感じてどう感じているか、支援について、また子供の将来について等）の心境変化と、感想コメントの自由記述式とした。
- ・ 集計結果からは、1年間の活動を終え、参加者が子どもの特性を知ること、また知識を実践に役立てることができたことが伺えた。また感想コメントには、運営側の活動意図を酌んだものが多く見受けられ、スタッフにとってはこれからの励みとなった。

◆苦勞した点

- ・ 会員が増えれば増えるほど、多様性が増すため運営に工夫が必要になってきた。
- ・ 学びの質を落とさないことを考えると、スタッフの負担が増すことに繋がった。スタッフも全員が保護者でもあり、また仕事をしている者もいる事情があり、資料作成などの時間配分に苦勞した。今後の課題の一つである。
- ・ 盛りだくさんの内容であるが故、予算配分に難しさがあった。
- ・ 講師の方への謝礼が薄謝となることが最も頭を悩ませるところであった。

◆今後の課題・発展の方向性

- ・ 講演会は教育委員会などの後援を取るなど、もう少し視野を広げてPRしていけたらと思っている。
- ・ 次年度は会設立から6周年目になる。保護者の立場で、より継続的に自閉症支援に取り組めるような枠組みを模索したいと思う。
- ・ 任意団体であることや、会員への過度な負担を掛けないポリシーから、資金力がないため、継続と言った意味では今後への不安が常にある。
- ・ 今後は親子活動や交流会の中でも、保護者の学びとプログラムの効果を数値化していきたいと思う。

◆活動を終えての感想・意見等

貴団体にご支援頂いた事で、活動の幅をさらに広げることが出来ました。

また同時に、会の活動内容を評価して頂いたという「喜び」と共に、私達スタッフの視野や展望が広がり、お金には代えがたい「次のステップへの希望」を頂きました。

まだまだ微力で未熟ではございますが、障害のある子供たちが、将来「より豊かで自立的な生活」を送る事ができるよう、学び続けると共に、「保護者の会」ならではの社会貢献を、これからも模索しながら続けていきたいと思ひます。ご支援、誠にありがとうございました。

活 動 名	No.7	団 体 名	特定非営利活動法人 食べて語ろう会
青少年の非行・再非行防止による健全育成活動		地 域	広島県広島市
		代 表 者	理事長 中本 忠子
		支援金額	35 万円
活動概要	1. 様々な家庭の事情により、満足に食事がとれないため、万引等の非行に走るおそれのある子どもたちと食卓を囲み、温かいご飯を腹一杯食べさせ、その過程で子どもたちの声に耳を傾けて相談に乗り、空腹を原因とする非行や再犯を防止すること。 2. 有識者による講演会の開催や各種団体の視察、マスコミ取材の機会を利用して、子どもたちの立ち直り支援を行うことの重要性を訴え、本会の活動に対する理解と協力を得ること。		



広島市中央公民館での調理スタッフと活動の様様



基町の家での調理スタッフと活動の様様



夏休みに子供たちと郊外でブルーベリー摘み



湯崎英彦知事の視察

◆実施に伴う効果

1. 子ども食堂に対する影響

本会の中本理事長は37年前から食事の提供を通じて困難な問題を抱える子どもたちの救済に努めてきましたが、最近、広島市内でも子どもの貧困が社会問題化したことを背景として、約20団体がいわゆる「子ども食堂」を立ち上げて活動を始めています。広島市社会福祉協議会では、子ども食堂の育成を図るため、「広がれ、子ども食堂の輪推進委員会」を主催して定期的に情報交換の場を設けるとともに、8月27日には、「広がれ子ども食堂の輪!全国ツアーin広島」を開催し、本会も活動報告を行いました。また、本年3月25日には、同協議会において「社会的課題に取り組む地域福祉活動実践発表会」が開催され、本会も子ども食堂を運営するためのノウハウ等を紹介しました。

2. 行政等関係機関の視察

長年にわたって食事提供を続けてきた本会の活動に対する関心が高まり、地域団体や法務省等関係機関の視察が相次ぎました。

3. 本会の活動に対する市民の反応

本会の活動に対し、市民から激励と称賛の投書が相次ぎ、中国新聞(11月4日、12月6日)の「広場」欄に、「食の教育支援に感銘」「食事で更生支援 尊敬」と題した記事が掲載されました。

◆苦勞した点

1. 食事提供数の増加に伴う食材費の確保

平成28年12月に新たな拠点「基町の家」の整備を終え、活動を開始しましたが、これを機に食事に訪れる子どもたちが急増し、食事提供数は一月当たり1,000食を超えるとともに、食材購入費も毎月20万円前後で推移し、年間200万円以上にのぼっています。無料で食事提供を継続するためには、貴財団のほか、日本財団など多くの財団へ助成金の申請を行い、事業資金を確保しましたが、殆どが1年限りの助成のため、次年度は新たな助成先を発掘する必要があると、助成金の確保が事業の成否を左右し、大きな課題となっています。

2. 調理スタッフの処遇改善

食事提供数の増加に伴い、調理スタッフの拘束時間も増え、多い者で一日9時間(月250時間)にも及んでいます。そのため、平成29年度は処遇改善を重点として取り組み、1回調理に従事した場合、百円を謝金として支給するとともに、公共交通機関で往復する者に対しては、運賃実費を支給して処遇改善に努めました。

◆今後の課題・発展の方向性

現在、調理スタッフは、15名程度が活動し、そのうち4名がほぼ毎日調理に従事しており、1回百円では、月5千円程度にしかならず、引き続き処遇の改善を図る必要があります。

また、理事長に対する講演依頼、視察、マスコミ取材なども増加しており、負担軽減のため後継者の育成に迫られています。一方、事業活動の拡大に伴い、事務局の業務も増加しており、組織体制の見直しを図る時期に差し掛かっていると考えております。

◆活動を終えての感想・意見等

2017年度も食事に訪れる子どもたちが、万引き等の非行によって補導されることがなく、食事の提供を通じて青少年の非行防止を図るという目的を達成することができました。

なお、助成金申請の過程では、申請団体や事務局の皆様との交流会を開催して頂くなど、心のこもった対応に対し、心より御礼を申し上げます。特に、長年お世話になった世良和美様には大変感謝しておりますことをお伝えください。

活 動 名	No.8	団 体 名	府中町家庭教育支援チーム「くすのき」
「地域全体で子育て・親育ち応援!!」 ～地元を愛し、お互いに元気になろう～		地 域	広島県安芸郡
		代 表 者	コーディネーター 米田 珠美
		支援金額	40 万円
活動概要	① 「親プロ」・「しゃべり場」・「子育て相談」の継続、拡大。 ② 家庭教育支援チーム「くすのき」の活動の周知・体制強化、新たな教材の開発。 ③ 新たなファシリテーターの発掘・養成、チーム員の資質向上のための研修。 ④ 不登校の児童・生徒・ひきこもりの人の保護者の苦しみに共感し、講演・カフェによる悩みの軽減、学校との連携、必要に応じて専門機関への橋渡しの事業に取り組む。		



カフェ「くすのき」



家庭教育講演会



ハッピーズ



チラシ

◆実施に伴う効果

不登校支援のカフェくすのきに参加された保護者どうしが知り合いになられ、連絡をとられるようになったと学校から喜びの連絡があった。アロマ、カラー、手芸をセットで取り入れたことにより、五感を使いゆったりした気分ですしずつ良いおしゃべりができている。継続して参加して下さる方も増え、保護者の表情も明るくなってきている。少しずつ輪が広がっていると感じている。

家庭教育支援チームの活動が周知されたことで、これから家庭教育支援チームを作ろうとしている市町に向け、広島県教育支援活動推進委員会で家庭教育支援チームのモデルケースとして事例発表した。

今年度は、宮城県、鳥取県、山口県などからも視察があり、事業の内容や他の部署との連携について、学びの場への参加しやすさの工夫や待つのではなく親子の集まるところに出向くなどの活動が、参考になった、自分のところでも取り入れてみたいと言われた。

◆苦勞した点

不登校・引きこもり家庭への支援はとてもデリケートな問題で、個人情報保護の壁などもあり、最初は届けたい家庭へ情報の提供ができず、講演会への参加者を募るのが難しかった。

同じ学校に通っていても子供が不登校のため、参観日などに出席することもなく、保護者が孤立しているケースも少なくないことがわかった。また、子供が引きこもっているのに、親が外出を楽しんでも良いのかと罪悪感を持つ保護者もいたので、親子で集える場にしたのは良かったと思う。

教育委員会の学校支援課や小中学校へチラシの配布をお願いしたり、公共施設にチラシを置いていただいたり、知り合いを頼って情報を届けてもらったりした。

場所も学校内や公共施設では、同級生などの目もあり出かけにくいのではと考え、小高い丘にあり、人目につきにくい民間の施設(青少年文化センター)を選んだ。

少しずつであるが、口コミで参加者が増え、アンケートに「不登校の悩みを話せる場がなかったので、嬉しい。」「カフェに来るのが楽しみ。」と書いてくださる方もいらっしやり、手ごたえを感じている。

不登校や引きこもりの状況はケースバイケースで、これが正解という解決法はないし、すぐに効果や結果のでもものではない。「カフェくすのき」などのチームの活動は入口(はじめの一步)だと思うので、それぞれの方に合った出口へつなげていけるよう関係各所との連携を深めるとともに、時間をかけて家族に寄り添っていきたいと考えている。

◆今後の課題・発展の方向性

リーフレットも作成することができたので、平成30年度はチームの更なる周知と、支援者のスキルアップを図りたいと考えている。心理カウンセリング講座の受講やステップアップ研修を予定している。

平成29年度にチーム員への連絡手段として連絡網システムの導入を検討したが、継続して経費がかかることから断念した。会員数は増えているが、活動しているメンバーとあまり活動していないメンバーがいるので、連絡網システムを導入し、情報の共有化や機会の均等をはかり、活性化したい。

また、持続可能な支援のために、後任の育成やチームの体制を見直していきたい。

不登校支援の『カフェくすのき』を継続開催し、町内南部だけでなく、北部の保護者や児童にも参加してもらえよう更なる周知に努めるとともに、高校生や青年の引きこもりに悩む家族にも支援の対象を広げていきたいと考えている。

学校、福祉、子育て支援との連携も強めていきたい。

◆活動を終えての感想・意見等

マツダ財団の助成金をいただける団体ということで、家庭教育支援チームの信頼度が増し、近所の方に活動を知っていただくきっかけにもなった。

今まで、資金不足で取り組むことが出来なかった不登校や引きこもりの子供や保護者への支援を始めることができ、実際に開催したことで、支援活動の必要性を再確認し、その意義を強く感じた。

最初は沈んだ表情で来られた家族が、回を重ねるごとに表情が明るくなり、「子供がカフェくすのきに行こうって言うんです」と笑顔で言われた時には、本当に嬉しく思った。

今年度、助成いただいたマツダ財団には本当に感謝している。

活 動 名	No.9	団 体 名	棚田開墾モリモリ倶楽部
棚田開墾モリモリツアー(日帰りお楽しみ編)		地 域	広島県安芸高田市
		代 表 者	会長 岩下 雅俊
		支援金額	25 万円
活動概要	全4回開催（第3回は、台風のため中止）し、参加者延べ70人、スタッフ延べ47人、地元住民延べ8人、田楽保存会19人の参加を得た。 各回とも午前中は、スコップで耕作放棄地の開墾を実施してもらい、午後は田植え・竹林整備・サツマイモ掘り等を体験することで農業に親しみを持ち、中山間地域の素晴らしさを感じてもらった。		



耕作放棄地の開墾作業



昔ながらの田植え体験



昔ながらの田植え体験



全員で集合写真

◆実施に伴う効果

- ① プロジェクトを行ったことで、安芸高田市八千代町向山 本郷地区で都市部の住民を呼び込んで、耕作放棄地の開墾作業を行う自信ができました。
- ② 開墾作業とセットで行った田植えや餅つき、サツマイモの収穫など、スタッフでプロジェクトのノウハウを蓄積できました。
- ③ JTB広島支店の社員さんが5月と6月のプロジェクトに参加され、自社でも実施したいということで、10月12日に「地球いきいきプロジェクト」として、私たちが行ったツアーと同様の内容で「棚田再生プロジェクト」（耕作放棄地の開墾と稲刈り）を実施されました。そして、引き続き耕作放棄地を開墾し、稲作をしたいということです。今後の展開が楽しみです。
- ④ 次回からは、耕作放棄地の開墾に、空き家の再生など少し変化を加えて実施したいと思います。

◆苦勞した点

PRはチラシとフェイスブックを中心に行いましたが、集客に苦勞をしました。

JTB広島支店さんが主催された棚田再生プロジェクトは、参加費無料でしたので、すぐに予定人員が集まりましたが、私たちが実施したツアーは有料だったためか、なかなか人数集めに苦勞しました。

今回は、広島県の「ひろしまさとやま未来博」ココロザシ応援プロジェクトの採択も受けましたので、開催費用は貴財団と広島県補助金、参加費で賄うことができましたが、来年度は補助金がないので、参加費を増やすか規模を縮小して行うことを検討しています。

◆今後の課題・発展の方向性

集客力を増すためには、より魅力的な内容にブラッシュアップしていく必要があると感じました。

限界集落を元気快復集落にするために、都市部住民の移住が最終目標ですので、耕作放棄地の開墾のみではなく空き家の再生も加えてみたいと思います。

◆活動を終えての感想・意見等

日頃の活動（開墾作業、稲作、野菜作り）に加えて今回のツアーを実施したので、年4回のツアーは結構スケジュール的に厳しいと感じました。次回は、回数を減らし、スタッフの負担も少なくなるようなイベントにして、継続して行えるようにしたいと思います。

活 動 名	No.10	団 体 名	美鈴恵みの森づくりボランティア
美鈴恵みの森づくりボランティア		地 域	広島県広島市
		代 表 者	会長 松本 満
		支援金額	17 万円
活動概要	私有林の荒れた里山を整備し、市民が気軽に歩ける遊歩道を造成中。活動広場は鬼が城山（282.4m）のふもとに位置しており、登山道の入り口になっている。遊歩道や広場は年配者や幼児まで気楽に利用できるよう解放している。遊歩道の道端には桜、モミジ、栗、椿、シャクナゲなどの植樹を継続中。里山を整備した時に発生する林材は薪、椎茸原木、クラフト材、炭材などとして運び出し、資源を有効活用している。里山の恵みを活かした教育研修、イベントにも力を入れており、平成29年度は23イベントを開催し、延べ833名の参加があった。 多くのイベントを通じて自然の楽しさ、大切さを味わうとともに地域の親睦にも大きく寄与している。		



マツダ財団から頂いたテントの”こけらおとし”も兼ねた観察会



親子美鈴づくり教室



木工クラフト



門松づくり

◆実施に伴う効果

- ・ 今までになく多くのイベントをほぼ計画どおり推進することができた。
参加者も833名と多くの人に自然の大切さや自然に触れ合うことにより森の大切さの理解を深めることができた。
- ・ イベント実施に当たり、美鈴が丘小学校、美鈴が丘児童館、森の幼稚園、美鈴が丘こどもの園と連帯意識が深まった。
- ・ 椿谷を拠点とした美鈴恵の森づくりボランティアの活動が住民に広く知られるようになってきた。

◆苦勞した点

イベントの実施に当たって、毎回、参加者の確保に苦勞した。
しかし、小学校、児童館、サムエル子供の園の協力で実施できたイベントもあり、お互いに信頼関係が増し、パンフレットを置かせてもらえるなどイベントの周知等がやり方易くなった。
イベントの結果はその都度、広報美鈴に掲載したので、森づくりの活動が住民に広く知られるようになってきた。

◆今後の課題・発展の方向性

多機能支援事業の助成があり、順調に進んでいるが、イベント実施に当たっては、参加者の確保が課題であり、どのように情報を提供するかが大きな問題である。
また、美鈴恵の森づくりボランティアのメンバーの高齢化が進んでいるので、若返りを図る必要がある。

◆活動を終えての感想・意見等

イベントを購入でき計画的なイベントの進行管理ができています。
大変助かっています。

活 動 名	No.11	団 体 名	多世代交流支援オルゴールシアター実行委員会
みんなで創り広げる「オルゴールシアター広島・山口の民話」プロジェクト		地 域	広島県東広島市
		代 表 者	代表 右田 悦雄
		支援金額	40 万円
活動概要	能力を持ちながら、なかなか社会的自立が思い通りにできない若者たちにも、お手伝いをしてもらい、プロジェクト参加者とともに、古くから残る広島・山口の民話をオリジナル脚本で書上げました。そして、手回しオルゴール曲の音色と紙芝居風に背景画をバックに流し、演劇風に朗読し、臨場感あふれる物語を展開する「オルゴールシアターの民話」を創りました。 この「オルゴールシアターの民話」を使って、多くの子供たちに、「ふるさと」を愛する心を育て、多世代の年齢、性別、障がいの有無を超えて交流するために、上映会開催やDVD配布による各施設、小中学校での上映、イベント等、心温まる交流の場を広げて行きました。 また、DVDを希望者に販売し一般の方々にも観ていただく機会を広げました。		



岩国の民話収録風景



本家松がね DVD 放映

主催・オルゴールシアター実行委員会
民話劇と生活者、手回しオルゴールの調べ

自鳴琴シアター in 岩国

9.24日 (Sun.) 14:00~15:30
観覧無料

出演：手回し自鳴琴 右田 悦雄
朗読：岩 崎 孝
音楽：中 島 孝
監修：岩 崎 孝

9月24日(日) 14:00~15:30
会場：岩国市立文化会館 本家 松がね
観覧料：一般 500円 学生 300円 高齢者 200円
お問い合わせ 0827-28-6600

オルゴールシアターin 岩国コンサートチラシ

オルゴールシアター 岩国の民話

オルゴールのやさしい音色で、物語がいきいきと動き出す

オルゴールシアター

岩国の民話

五感を刺激する感しの家族「手回しオルゴール」

岩国の民話

お前さまと錦帯橋 神の内の「稲持ち狸」

DVD

岩国の民話 DVD

◆実施に伴う効果

岩国市教育委員会を通じて、岩国市内の小学校46校、図書館8館の計54セットを寄贈し、市内の小学生や一般の方々にご覧いただくことができるようにした。地元岩国の民話を題材にした内容に、昔を懐かしんだり、故郷を愛する気持ちにもつながると、ご覧いただいた方々より好評を得た。岩国市教育委員会よりも感謝の言葉をいただいた。

「岩国市観光交流所 本家 松がね」では、常時、オルゴールシアターDVDが上映されており、地元の利用者だけでなく観光客も含めた幅広い方々にもご覧いただくことができた。

◆苦勞した点

今回、岩国の民話を地元の希望もあり、2作品にしたため、予算上、廿日市の民話の収録の費用が不足して、DVDの販売の状況を見ながら展開することになり、今回の期間中に収録・編集するまでにいたらなかった。その後、DVDの販売委託先もでてきたので、今後のDVDの販売の状況を見ながら、資金を捻出し、安芸の国の民話「あまんじゃく」のDVD化と展開を実現したい。

◆今後の課題・発展の方向性

- 1) オルゴールシアターを創り上げるには、脚本、劇中音楽作曲、背景画、朗読、歌の依頼等、編集に多くの費用が掛かるため、完成したDVDの販売資金をもとに、地道に広げていくことが大切になってくる。
- 2) 現在、呉市の方々からも民話の掘り起しの話もでてきており、脚本の題材や、協力者の掘り起しを進めていきたい。
- 3) 達磨オルゴール大学のネットショップが2018年1月にオープンし、今回のDVDを商品掲載してもらった。このサイトを通じて全国の方々へ知ってもらい、購入につなげていければと考えている。

◆活動を終えての感想・意見等

この度は、マツダ財団様のご支援をいただき、特に岩国市において、岩国市の協力も得ながら広く展開することができました。スムーズに展開できたのも、マツダ財団様のご支援を得ての活動であることが認知され信頼度が増し、うまく進めることができました。今後も、全国へのオルゴールシアターを求めている方々への販売での展開でも、継続してマツダ財団様の支援をいただいた活動であることを言わせていただき、広めて行ければと思っています。引き続き、ご支援、ご指導のほど宜しくお願いいたします。

活 動 名	No.12	団 体 名	一般社団法人ひろしまドリームマップ協会
次世代リーダー育成「将来の夢を描くドリームマップ」を作ろう！ in HIROSHIMA		地 域	広島県広島市
		代 表 者	代表理事 田岡 美江
		支援金額	25 万円
活動概要	1. 参加した幼稚園～小学 6 年生全員で自己肯定感をアップさせるワークをし、将来になりたい自分の姿を台紙の上に写真や文字で表すドリームマップを作成して、参加者と保護者の前で発表しました。 自己肯定感アップワークの内容は、自分の好きな事・得意な事や友達のいいところを発見し、言葉の言い換えやポジティブな言葉の体験をし、将来の夢や職業の下書きをしました。 台紙の上に写真や切り抜きを貼り、自分の夢をビジュアル化してドリームマップを作成し、参加者全員の前で発表しました。 2. ドリームマップ作成前に夢を叶えた大人の話を聴きました。 マツダ短大の学生・オタフクソース新入社員・賀茂鶴酒造の営業マン		



オタフクソース会場にて



マツダづれあい会館にて



マツダづれあい会館集合写真



賀茂鶴酒造にて

◆実施に伴う効果

- ・ ドリームマップ授業を取り入れていない小学校より開催依頼があった。
- ・ 企業とコラボ開催することにより、企業の方とのネットワークが構築された各地域に住んでいるドリマ先生が、イベント運営のノウハウが蓄積された地域の企業・ボランティア団体とも連携ができ地域貢献ができた。
- ・ 企業施設内で開催することにより、地域の方から信用を得ることができた

◆苦勞した点

【予算】

3企業とのコラボだったので、予算内に収まってよかった。

【外部へのPR】

PRについては、教育委員会を通じてチラシを配布して頂いた為、多くの参加者を集める事ができました

【参加者】

- ・ FAXでのお申し込みは定員に達したことが伝わらないので、次回はインターネット申し込みだけにする。
- ・ サポートするスタッフを今後は増やさないと対応が難しいと感じた、子どもへの声掛けなどコーチングの技術を勉強したスタッフが対応することが望ましく、スタッフ教育も必要と感じた。
- ・ 参加した若い社員さんの意識が向上し「結婚したい」「こどもが欲しい」という独身者からの声も嬉しかったです。

◆今後の課題・発展の方向性

【課題】

- ・ 教育委員会を通じてチラシを配布する以外の告知方法も導入しながら、もっと多くの場所や地域で開催し知名度をアップする必要があると感じた。
- ・ 多くの学校でドリームマップ授業を開催する為にはさらなる人材育成が必要と痛感した。

【発展の方向性】

- ・ 次年度は若い人（大学生や新入社員）とコラボし若い世代にPRできるイベントにしたい。
- ・ 協力していただく企業の業務内容や企業理念・社会貢献なども紹介し、職場体験などをしていただき、「将来の仕事（夢）を考えるキャリア教育イベント」にし、一人でも多く将来の夢を描ける場をサポートする若い世代が増えるようにしたい。
- ・ 若者向けの講座も同時に開催し、子どもの夢を応援する若者を増やします。
- ・ 企業やボランティア団体がこの活動を応援する事例を多く作ることで、広島県の全小学校でドリームマップ授業ができ、企業が学校を応援する仕組みを作りたい。

◆活動を終えての感想・意見等

参加された子どもや保護者より、参加して良かった！ありがとう！の声を多く頂きました。
今後の小学校での開催に向けておおきなPRになりました。

活 動 名	No.13	団 体 名	原南学区青少年健全育成連絡協議会
原南生き物ふれあい活動		地 域	広島県広島市
		代 表 者	会長 高野 誓吾
		支援金額	10 万円
活動概要	1. 「生き物ふれあい広場 in 集会所」 6月3日(土) 原南集会所にて、飼育ケージ内のカブト虫の幼虫を自由に手に取って触ったり、蝶専用の大型飼育ケージ内の蝶の幼虫に触れたり成虫を見て観察した。 2. 「生き物ふれあい広場 in 学校」 6月5日(月)～7月20日(木) 廊下にカブト虫や蝶専用の展示ケージを設置し、児童が休憩時間にカブト虫や蝶の幼虫と自由に触れたり、蛹から成虫への成長過程を日々身近に見ながら観察した。 3. 「夏休み 生き物ふれあい広場」 7月21日(金)～7月31日(月) 「はらみなみ ふれあいハウス(旧飼育舎)」で、中学生ボランティアや役員が案内役となり、児童達が約 30 匹のカブト虫の成虫、約 20 匹のツマグロヒョウモンの幼虫や成虫、約 30 匹のメダカと心行くまで触れ合った。 4. 「生き物ふれあい広場 in PTA バザー」 10月29日(日) PTA バザー開催時に、テント内でカブト虫の幼虫やメダカと自由に触れ合った。 5. 野鳥巣箱の設置 2月14日(水) 野鳥の巣箱を児童とともに木に設置し、営巣すると思われる野鳥を説明した。		



「生き物ふれあい広場 in 集会所」



「生き物ふれあい広場 in 学校」



「夏休み 生き物ふれあい広場」



「野鳥巣箱の設置」

◆実施に伴う効果

◆苦勞した点

- ①予算面においては、小学校の旧飼育舎を主に活用したことから、予算の範囲の中で準備することができたが、天井や仕切り壁などの抜け穴があり、今後カブト虫が逃避できないネットの全面張りが必要になった。
- ②外部へのPRについては、PTA以外の子ども会連合会や他団体へのPRは、共同開催団体ではなかったことから積極的なPRが難しかった。
- ③参加者については、学校側の協力をえて、参加児童数は当初の予定を大きく超えた。しかし、「夏休み 生き物ふれあい広場」では、期間の後半は数名程度となり当初の予定数に至らなかった。
- ④地域の理解については、PTAや老人会の協力が得られこの活動に賛同してもらった。特に高野会長は社協の定例会や小・中学校の協力者会議の場で、この事業の報告を定期的に行い他団体へのPRに努めた。

◆今後の課題・発展の方向性

(1)施設や準備物の課題

- ①旧飼育舎の補強
- ②参加者数を増やすためのアンケート実施
- ③カブト虫の成虫までの生存率を向上させるための対策検討
- ④飼育ケージやプランター等の、計画的な補修や更新
- ⑤幼虫や成虫の餌の確保

(2)活動に従事する協力者の募集

(3)対象となる低学年の意見収集

◆活動を終えての感想・意見等

学校や老人会の協力が嬉しかった。学校のホームページに活動を都度掲載、カブト虫の幼虫の提供、青メダカの提供等、とても心強い支援となった。

我々青少協の活動はほぼ固定化された事業が全てであり、新たな事業を起こすことは、限られた予算規模では非常に難しい状況にある。こうした中でも予算的に脆弱なこの事業を大きく踏み出せたのは貴財団より支援をいただいた御蔭であり、深く感謝している。

今後、子供達に小さな生き物を通して「いのち」の大切さを伝え、少しでも他人を思いやる心豊かな人間に成長してもらえよう、この活動を継続していきたい。

活 動 名	No.14	団 体 名	堂々川ホタル同好会
ホタルと花と砂留と		地 域	広島県福山市
		代 表 者	会長 高橋 孝一 代表 土肥 徳之
		支援金額	35 万円
活動概要	芦田川支流高屋川小支流、堂々川中流域一帯の清流をホタルなど多様な生き物の住める環境として保全するとともに、江戸時代に築造された登録有形文化財の砂留を保護する。これらの活動を通して人々との交流を図り、地区を明るくすることを目的にする。 しかし、ホタルを飛ばす川は不法投棄が多く、砂留は国の管理のはずだが、予算がないのか放置されている。そこで同好会は2009年から地域や多くの人の関心を得るために、ホタル以外彼岸花を植え始めた。その花が不法投棄を防止する監視の目の役割も担っている。当初は彼岸花の里広島県NO.1を目指すなど、思いもよらぬことだったが周囲の小学校や保育園と一緒に球根を植えていくうちに目標値ではなく手がとどく数値になってきている。今年度は18万本開花、花色18色はライバルの事故もあり瞬間的にトップレベルを体験した。		



◆実施に伴う効果

堂々川ホタル同好会はホタル・砂留・彼岸花をテーマに活動している。
砂留について 一昨年民間団体として初めて全国砂留シンポジウムを開催した。そのことから当会を参考にし、福山市の別所砂留等が素晴らしい活動を展開され、日本一の規模のものを探し出したり、他に小学校と一緒に活動するなどを始める事例もある。
又、今年度は福井県が第2回を、来年度は長野県が第3回を引継いで開催してくれることになった。
ホタルはお隣竹田地区が当会の紹介で新聞に報道されるようになり感謝されている。
彼岸花は9月彼岸過ぎの日曜日、口込み？で約300mの道路に車が駐車し、対応に困った。

◆苦勞した点

御野学区においては堂々川の活動に応援を貰えるが堂々川の地元の協力が得られない。川が綺麗になり、不法投棄も大幅に減っているのに感謝する人は少ない。個人的な好き嫌いなのか、定期的な活動をするのが嫌なのか原因がよくわからない。地元でホタルの活動を批判する人さえいるのはなぜだろうか？
こんな事例に対応されて、成功したケースがあれば、ぜひ教えていただきたい。

◆今後の課題・発展の方向性

多くのボランティア団体が困っておられると思うが、ホタル同好会も会が発足して12年経過しており、最初に参加した人は70代になっている。今後の後継者探しで困っている。

◆活動を終えての感想・意見等

堂々川ホタル同好会の大きな目的は不法投棄の防止、四季の季節毎に自然が作るイベントを作る事業もほぼめどがついてきた。後は定期的に草を刈ることを実施すれば、ホタルも花も十分対応してくれるのですが！
見学者は、ここ毎年3倍増になっているが作業に参加する人は減っている。
広島県トップレベルがそこまで来た。
その実感が感じられたことは「うれしい」の一言です。

活 動 名	No.15	団 体 名	ママの働き方応援隊 広島東校
教えて！赤ちゃん先生 ～わたしもあなたも大事な命～		地 域	広島県安芸郡
		代 表 者	代表 高田 裕美
		支援金額	25 万円
活動概要	いじめ予防や自殺予防を目的とし、小中学生に対し、実際に赤ちゃんに触れ合い、赤ちゃんが母親から生まれたときの話などを聞く授業プログラム「赤ちゃん先生クラス」を定期的・継続的に提供する。 各授業においては赤ちゃんが先生（＝赤ちゃん先生）であり、母親は赤ちゃんの持つ共感力を引き出す役割（＝ママ講師）を担うのが特徴である。授業では小中学生に10人ほどの輪になってもらい、その輪の中に赤ちゃん先生とママ講師が1組ずつ入り、赤ちゃんを抱っこしたり一緒に手遊びをしたりするなどのふれあい体験や、毎回テーマを決めてのグループトークを行う。		



小学校開催。控室にて赤ちゃん先生たちが勢ぞろいです



赤ちゃんをだっこ。小さいな。



中学校開催の1コマ。初めのご挨拶。



中学校開催の1コマ②。最終回の記念写真です。

◆実施に伴う効果

先生方から以下の声をいただいています。

- ・ 通常の時と比べて、赤ちゃん先生といるときは児童がやわらかく優しい表情をしている。
- ・ 赤ちゃんにも1人1人個性があることを子どもながらに理解したようだ。
- ・ 初めて赤ちゃん先生クラスを見学したが、子どもたちの穏やかな顔が印象的だった。
- ・ 赤ちゃんとのかかわりの中や学校での取り組みの成果もあり、お友達に優しい言葉で接したりできるようになってきている。

◆苦勞した点

できるだけ多くの学校に資金を配分できるよう、自己資金や開催希望校準備資金も含めてのやりくりで苦勞しました。互いに資金が足りず開催を見送っていただいた学校もあったため、今後の課題欄にも記載しておりますが、さらに資金獲得体制を整えたいと考えています。

◆今後の課題・発展の方向性

多くの学校が導入を検討してくださるようになり、助成金でまかなえない開催も多くなりました。現場の先生方が予算面のやりくりを頑張ってくださっている姿に接することも増え、お忙しい先生方が苦勞しなくてもすむように、他の地域のように広島でも公的予算でバックアップいただけるよう、さらに働きかけを強めていきたいです。

◆活動を終えての感想・意見等

継続してご支援いただいたことで、複数の学校で昨年度から連続して開催していただけることとなり、前年度の反省点を踏まえたプログラムを提供することができ、「赤ちゃん先生」の質をより高めることができたと思います。

三入東小学校やとりたまカフェなど、独自に助成金を獲得して呼んでくださる事例がでてきたこと。また、全国で初めての試みとなる女子少年院での開催導入につながったのは、貴財団の支援によるものであり、活動実績を積み上げられたおかげです。

改めまして、2017 年度も当団体の活動をご支援くださり誠にありがとうございました。

活 動 名	No.16	団 体 名	鞆の浦の共生を実行する会
若者と高齢者が共生する街づくり活動		地 域	広島県福山市
		代 表 者	代表 牧田 幸文
		支援金額	20 万円
活動概要	若者と高齢者が共生する街づくり活動の目的は、高齢化する鞆の浦において、地域住民と若者が一緒になって、地域で高齢者や子どもたちの見守り活動・防災活動・空き家対策に取り組み、地域の活性化と住民と若者の連携・交流を目指す。 今年度は、鞆町での空き家掃除と対策、高齢化が進む平町での祭りに参加し、地域の活動を支援した。また、8月に行われた鞆の浦まちづくり塾の講習を受けて、地域の特徴とノーマライゼーションおよび高齢者が住みやすい地域づくりを学んだ。鞆小学校から依頼を受けて、小学生と連携して英語観光ガイドのボランティアを派遣し、交流を深めた。学生たちが違う文化を持つ人たちの生活文化を知るために、社会人類学者を招聘し、「異文化を理解し、共生を考えるセミナー」を開催した。 そして、同じような高齢化が進む地域と高齢者支援を実践している事業所を訪問し、多文化の背景と持続可能な地域形成にかかわる人たちの話を聞くツアーを実施した。		



空き家掃除プロジェクト



平地区のお祭り参加



福山市立大学 ジョイ・ヘンドリー名誉教授(オックスフォードブルックス大学)「異文化を理解し、共生を考えるセミナー」



鞆町 空き家見学会。7月に実施した空き家掃除プロジェクトで清掃した家に入った住民と交流会。

◆実施に伴う効果

本活動の目的は、地域活性化を実践している人たちと出会い、活動の内容を聞き、さらに学生たちが現場に出かけ、できる限り地域の人たちと活動と一緒にを行うことであった。すぐに学生たちが地域の人たちに溶け込んで、地域住民の見守りや活動に参加することは難しい。しかし、本会の活動を数回重ね、地域の高齢者と顔見知りになる機会を得ることができた。特に空き家掃除プロジェクトでは大量のごみをNP0主催の方と一緒に片付け、分類することで協同が生まれた。また、祭りに参加し、住民の人たちとの交流することができた。今後も高齢化が進む地域での祭りの継承に寄与できると地域住民から喜んでもらうことができた。他には、小学生の英語ガイド活動にも参加し、地域の観光資源について一緒に学ぶ機会を得た。福山市に住む学生たちは、鞆を観光の場所として認識しているが、高齢化が進む地域の実情を知らない。しかし、今回の活動を通して、都市経営や教育を学ぶ学生たちが実際に地域に何度も訪問し、地域住民と協同する機会を得ることができた。学生たちは大学で学ぶ理論だけではなく、地域で実践的な経験を積むことによって、今後のまちづくりを考案し、積極的に貢献することが期待できる。

地域の実情はそれぞれ違いがある。そのため、一時的な見学だけではなく、継続して地域住民と関わることが重要であり、今年度は導入として活動が十分できたと考えられる。また地域住民からの期待もあり、2018年度の空き家清掃プロジェクトの依頼を受けている。今後、地域の空き家の状況を把握しながら、新しい発想で地域づくりに貢献できると考えられる。

◆苦勞した点

学生の授業と活動の日程が重なることもあり、日程調整が困難なこともありました。空き家掃除プロジェクトでは、学生の集まりを待って活動を実施したこともあり、全日程で学生たちが十分に参加することができない状況でした。

また、外部へのPR不足もあり、当初予定していた、9月の夏祭りや10月の防災活動は、人手不足と地域の人たちとミーティングする機会を持つことができず、実行できませんでした。

今後は、外部そして学生への周知を早く実行し、活動を広げていきたいと考えています。

◆今後の課題・発展の方向性

今後の課題は、まだ多くある空き家の状況の把握と防災の観点で空き家をどう管理するのかについて、地域住民との交流を交えながら、学生たちの新しいアイディアを地域活動に積極的に盛り込みたい。また、鞆への移住者との懇談会を実施して、鞆の魅力とその発信を学生の企画として運営してもらいたいと考えている。鞆に住むことの魅力をソーシャルメディア等で、国内外に発信し、広く周知することも実践したい。住民の年齢の若返りや、高齢者を支える住民の増加や関係人口の増加につなげたい。

◆活動を終えての感想・意見等

今回の活動に参加した学生のコメントを掲載します。

福山市立大学2年生 E君

この1年を通して、鞆町で多くの活動をしてきた。鞆町では空き家清掃に携わり、祭に参加することで住民との交流を実現した。そしてこの活動を通して、実際に足を運んで調査することの重要性を改めて理解することができたと考えている。

鞆町の空き家問題について、以前の自分は新聞やテレビのニュースで小耳に挟んだ程度の知識しかなく、漠然と、その地域で問題が発生しているのだ、という程度の認識しかできていなかった。

認識が大きく変わったのは現地入りしてからのことだった。空き家の現状や祭の様子を目の当たりにした。空き家は、瓦を用いた和風のものや一昔前のデザインのもの等多種多様であった。そんな特に難しいことはしていない調査にもかかわらず、実際に目で見たり耳で聞いたりして得た情報はとても新鮮に感じられ、まるで貴重な品を自分が手に入れたかのような満足感に見舞われたのだ。まさに「百聞は一見にしかず」の感覚で、現地入りする前に確認した情報も、現地で実際に目で見て確かめたことで、現実味を帯びて納得できるものとなった。

この1年を通して何かしら研究をするのであれば文献調査だけではなく、現地での視察で判明した事実も併せることで深みが増すのだと、身をもって理解できた。残りの1年は就活が終わり次第卒論のために費やすことになると思うのだが、卒論が完成するまでの間に調査対象の地域は勿論のこと、それ以外にも興味を持った地域へ、機会があれば赴いて観察をしてみたいと思えるようになったのは大きな変化だと思う。

活 動 名	No.17	団 体 名	NPO 子どものひろばヤッチャル
しごとしつとこ U18		地 域	広島県東広島市
		代 表 者	代表 間瀬 尹久
		支援金額	21 万円
活動概要	「自らの将来を考えるのに必要な、知識、体験、ロールモデルが不十分な外国につながる子どもたち（特に 10 代）に、それらを提供し支援者とともに考え話し合うことで、子どもたちが自分の将来を『自分で』切り開いていけるような力を身につける」ことを目的として、外国につながる子どもたちの宿泊活動（1 泊）を行った。実施した活動は①広島大学オープンキャンパス見学、②仕事をしている人（講師）の話を聞きヨガ実技を行う、③子どもの時に来日し、現在、日本で仕事をしている先輩講師（ロールモデル）の話を聞く、④レクリエーション（スポーツ、切り絵、料理）の 4 つである。④レクリエーションの指導は③の先輩講師が行った。参加者（子ども）の年齢は 10～21 歳、先輩講師は 40 代、30 代、20 代であり、幅広い層の「外国につながるのある」メンバーが集まった。その中で年長者は後輩の世話やアドバイスを行い、年少者は先輩から身近な経験談を聞いたり悩みを相談したりした。日頃接触の少ない異年齢の仲間と寝食をともにすることで、多くの語り合いが生まれた。先輩の苦労、努力を直接聞くことで、子どもたちは『日本での自分の将来』について、多くの示唆を得ることができた。活動終了後、参加者から、進路に関する悩みや相談を受けることが増加した。さらに、にほんごひろば U18（通常活動）をはじめとする他の活動への参加者が増加し、子ども同士の交流が深まっている。		



河井先生といっしょに立木のポーズ(ぐらぐらしちゃう～～)



広島大学オープンキャンパスで大学図書館を見学
(どんな本があるのかな?)



切り絵製作中(真剣・集中・静寂)



滞日 27 年の先輩とともに
「若い頃は何も考えなかったけど結婚したら責任を感じたんだ」

◆実施に伴う効果

NP0こどものひろばヤッチャルは、通常活動として「にほんごひろばU18」（学校外での日本語学習、教科学習支援、居場所づくり）を行っている。その中で、活動の幅を広げること、支援者の和を広げることが喫緊の課題となっている。そのためにも、地域社会に活動を知ってもらう必要性を痛感している。今回の「しごとしっとこU18」では実現しなかったが、東広島青年会議所への協力要請を行い、今後の協力を確認できたことは大きな収穫であった。

◆苦勞した点

- ・ 申請時の計画から大きな変更が必要となった。当初は日帰りで複数回の職場見学、職業体験などを予定していた。3月下旬の支援決定直後、子どもたちから宿泊希望が出された。その為、支援金額+参加費の範囲内で可能な活動計画を組み直すことになった。子どもたちの希望を聞くタイミングが難しかった。
- ・ 当初計画していた職場見学、職業体験などは、東広島青年会議所に協力を依頼した。しかし、青年会議所への具体的な呼びかけが遅れ、事務手続き等が間に合わず実行できなかった。外部への支援要請に必要な知識、心構えなどが本団体に不足していたことが、その要因である。東広島青年会議所は活動に対して理解を示し、今後の協力を約束してくれた。
- ・ 東広島青年会議所の支援が得られなかったため、講師依頼の方針を「仕事体験」から、子どもたちと同様の体験をしている「先輩（ロールモデル）」に切り替えた。これにより、より身近な人に講師を依頼したため、子どもたちにとっては現実感のある（手が届く）活動となった。
- ・ 通訳講師が確保できなかった。そのため通訳の練習はできなかったが、子ども同士で可能な限り通訳を行なった。子どもに通訳させることで「自分が助ける立場になった」ことが自覚でき、自己肯定感を醸成することができた。
- ・ タクシー、ひろしま国際センターの無料送迎バスなどを利用し、交通費を可能な限り抑えた。
- ・ 印刷費の見積もりに見込み違いが生じたが、交通費の節約などにより対処した。

◆今後の課題・発展の方向性

当初計画していた職場見学、職業体験は実施できなかった。今後、東広島青年会議所と連携し、職場見学、職場体験、ボランティア活動への参加などを企画したい。

今回行なったようなロールモデルとの交流、異世代交流を継続し、話を聞く機会を作っていきたい。

日本で生きていく上で仲間を作ることは、子どもたちの人格形成上不可欠であり、宿泊活動はそれに大きく寄与している。子どもたちからの要望も非常に多い。すでに多くの子どもから「来年もやろうね」という声が上がっている。今後も、何らかの形でNP0ヤッチャルの年中行事としていきたい。

職業紹介、職場見学の感想などを多言語で発信し、外国につながる子どもたちに情報交換の場をつくることを試みたい。今年度から始める予定であったが、職場体験ができなかったことで、職業についての具体的な情報発信には至らなかった。

◆活動を終えての感想・意見等

職場見学、インターンシップはできなかったが、「外国につながる子どもたちの『将来』を切り開く第一歩」という活動の基本線を維持し、より基本的な活動（ロールモデルとの交流、異年齢交流）を行うことはできた。

通常、子どもたちの将来を見据えた活動ということでは、職場見学、職場体験を第一に考えることが多い。しかし外国につながる子どもたちにとっては、職業を考える以前に、まず「日本で生活（自立）する」ことを、自分のこととして現実感を伴って自覚する必要がある。自分の意志と関係なく日本に来て、異言語、異文化の中で苦勞するという同じ体験、さらに仕事をして自立するという一歩先の体験をした先輩たちとつながることが、子どもたちが自らの将来を考える契機になる。今回の活動で、その重要性を再確認した。それがあって初めて、職場見学、職業体験（インターンシップ）が成り立つのだと痛感させられた。

自分たちのグループの中で密度の濃い異年齢交流が行われたことで、「にほんごひろばU18」がいつそう、子どもたちの心のよりどころとなってきたと感じられた。これも、子どもたちの人格形成に必要不可欠であると再認識した。

活 動 名	No.18	団 体 名	ひねもすようこそ
地域の誰もが集える場～ひねもすようこそ～		地 域	広島県広島市
		代 表 者	代表 池岡 洋子
		支援金額	20 万円
活動概要	1. 障がい児者や高齢者のかかえる地域の課題を少しでも解決できる手立てはないものか、また制度では解決できないかもしれない隙間のお手伝いができる事業が必要ではないかと考え、本事業は協同労働というシステムを取り入れ3年前にひねもすようこそを立ち上げるに至った。 2. 障がい児者、高齢者の抱える悩みや困りごと等、早急に対応していくべき課題への取り組みである。高齢者・障がい者・病者・子育て中の親など、色々な人が入り混じって、共に過ごす空間を作りたいと願っている。		



3 周年コンサート



カーブ観戦(ピースナイター)



備北イルミにバスでお出かけ

◆実施に伴う効果

- ・ 障がいをもつ子たちの土日休日の行き場としてひねもすに集まり活動することで、人との関わりを持ったり充実した生活を送ったりすることができるようになった。また、家庭と学校又は作業所の行き来だけの生活だった障がいをもつ子たちの活動の幅が広がることで、できることが増え、少しずつではあるが成長がみられる。地域とのつながりも持つことができるようになった。
- ・ 大型バスを借り切って実施した備北イルミは、10代から80代の幅広い年齢層の団体となり、障がい者も高齢者も一緒に過ごし、楽しい旅行となった。実費ではとてもできない遠出のバス旅行が実施でき、地域の方にも喜ばれた。
- ・ 地域サロンは、高齢者や地域の方の集いの場になっている。歩いて来ることでできる場所が地域には必要である。人が集まり話をしたり活動をしたりする場として活用されている。
- ・ 高齢者の生活に困難なことが増えているが、頼めるところが見つからない方も多い。サロン等でのつながりが、困りごとの支援につながっている。需要が増えており、地域包括支援センターからの問い合わせや紹介も増えた。

◆苦勞した点

- ・ やりたいことはたくさんあるが、少人数のスタッフでの活動には限りがある。スタッフを増やしていく必要がある。
- ・ 障がい者支援も高齢者支援も、利用料や参加費はもらっているが、できるだけ利用者に負担のかからない金額に設定している。運営としては、厳しい予算で行うことになるが、収入源になるものはなかなか見つからない。
- ・ サロンの参加者は、固定化した面がある。通信やイベントなどでの呼びかけを行い少しずつ増えてはいるが、もっと広げていけるよう努力する必要がある。

◆今後の課題・発展の方向性

- ・ ひねもすスタッフやボランティアスタッフの確保ができるよう働きかけていく。
- ・ 事業を長く継続していくために、助成を受けたり、不労収入の良い方法はないか考えたりし、資金確保をする。
- ・ 新しい利用者が増えていくよう、サロン内容をさらに検討していく。
- ・ 高齢者の困りごとはどんどん増えている。広報することやコミュニケーションを図るなどし、地域の困りごとと支え合い事業を充実させたい。

◆活動を終えての感想・意見等

- ・ サロン講師に講師料、ボランティアスタッフに交通費を出すことができたので、頼みやすかった。
- ・ バス旅行に行くなど、普段ではできないことが実現した。ひねもすようこそは、障がいをもつ子たちに色々な経験をさせたいことと、障がい者も高齢者も共に集える居場所作りを目指している、その一つとして今回のバス利用は、大変意義あるものだった。

活 動 名	No.19	団 体 名	ELCAP(Etajima Local Culture Art Philosophy)
江田島を基点としたアートと哲学による青少年育成		地 域	広島県福山市
		代 表 者	上村 崇
		支援金額	20 万円
活動概要	本活動は、アーティストと哲学研究者がそれぞれの特性を生かし、青少年の自己表現力と対話力を育成するイベントプログラムを作成、実行する。企画したプログラムでは、子どもたちがひとつのテーマについて哲学対話形式で語り合いながら、そのなかで形成されてきた言葉やイメージを、子どもが個別に、あるいは集団で作品として創作・展示するアート活動を実施するイベント形式を採択した。また、イベントに参加する保護者も子どもたちとは別に哲学対話とアート活動に参加してもらった。保護者と子どもたちが別々に哲学対話とアート活動に参加することで、イベント参加後に家庭で保護者と子どもがイベント内容について語り合う家庭内対話の効果も生み出した。本年度は、昨年度活動支援いただいたイベントプログラムを汎用性のある普遍的なものに洗練することを目的とし、イベントを開催した。		



◆実施に伴う効果

2年間の活動を通して、哲学対話が江田島地域でかなり浸透したことが地域・社会に与えた影響として挙げることができる。また、ELCAPの活動を通して、公民館や図書館との連携が強まった。ELCAPの活動だけではなく、下記に示すように、江田島市中町公民館で3回の哲学カフェ講座を実施することができた。さらに平成30年度には江田島し能美図書館で定期的に哲学カフェを開催する企画が進行している。

◆苦勞した点

本年度は、昨年度のプログラムを普遍性のあるプログラムへと洗練させていくことを目的としていた。そのため、昨年度のようにプログラムの作成に関して一から作り上げる苦勞は少なかったと言える。しかし、岩国・福山・岡山のメンバーが連携を取りながら議論を重ね、プログラムを構築していく労力は大きなものであった。

活動のPRは主にFacebookとこれまでの参加者メーリング・リストで告知した。県外の哲学カフェや哲学対話に関心を持つ研究者や教育関係者、一般の人々にも広くELCAPの活動を告知することができて、興味を抱いていただけたことはありがたい。実際の参加者については、江田島は交通手段が限られていることや参加日程が合わないなどで、参加したくても参加できない人がいたことは残念である。

◆今後の課題・発展の方向性

＜今後の課題＞

ELCAPのプログラムを広島市や福山市でも実施したかったが、企画者（ELCAP）と開催場所のスケジュール調整がつかずに実現が難しかった。広島県全域でELCAPのプログラムを展開するために、プログラムを洗練させながら、各地開催場所や協力者を探し、連携していくことが今後の課題である。

＜発展の方向性＞

本年度目的に設定した「プログラムの洗練」は、アートと哲学対話の融合に関心がある人々にELCAPのプログラムを共有してもらおうという意図があった。今後、ELCAPのスタッフが揃わなくてもこうした実践活動が継続していく体制を作っていくことが求められる。現在は、プログラムを洗練させるとともに、哲学教育に関連する学会とのプログラム共有、書籍化による広範囲での報告等も視野に入れている。

哲学対話に関しては、上記「実施に伴う効果」でも示したように江田島に定着し、現在も公民館や図書館で講座として開設されており、青少年のみならず市民にも開かれたかたちで実施されている。地域への哲学対話の定着を礎にして、今後のアートと哲学対話を融合した活動をさらに充実したものにしていくことができると確信している。

◆活動を終えての感想・意見等

ご支援をいただき、ELCAPの活動が充実したものになりました。本当に感謝しております。

本年度の活動支援に応募しなかった理由は、これまでのプログラムを洗練させる時間が必要だと判断したことと、青少年だけではなく、市民に開かれた哲学カフェを開催してほしいという要望が保護者や周囲から数多く寄せられたため、哲学カフェの定着をさらに図ろうと思ったためです。

来年度はまた活動のご支援をお願いするかもしれません。

ELCAPの活動は継続しておりますので、今後ともどうかよろしくお願いいたします。

活 動 名	No.20	団 体 名	みやじま未来ミーティング
『親子で体験！五感で実感！大きな発見』宮島の自然と環境を楽しもう！& 大学生ボランティア育成事業		地 域	広島県広島市
		代 表 者	馬場田 真一
		支援金額	25 万円
活動概要	平成 14 年から、宮島の自然を、守り・伝え・活用することを目的に、「環境学習プロジェクト」「海岸環境回復プロジェクト」に取り組んでいます。特徴は、親子（子どものみも可）を主対象としている点です。自分たちで考える・やってみるという「体験」に力をいれ、宮島の自然を知ると同時に集団生活で仲間との活動を通して自己成長を促すことを目指しています。 大学生と企画チームを作り、企画から実施までのプロセスを支援プログラム実施し、活動リーダー育成及び、実践の経験値を積み上げました。		



広大生によるカキを使った浄化実験 機械でにごりの変化を記録



火と刃物のリスク管理学習会
リスクの書かれたプリントに何がリスクかを書き発表



釣った魚のさばき方教室を実施 「いただきます」までの勉強



実行委員会メンバーの前で学生が企画紹介

◆実施に伴う効果

- ・ 一般参加者
自然遊びにふれ、現在の瀬戸内海環境について学び、保全の意識を持ってもらえた。
清掃活動においては、235 k g のごみを処理した。
- ・ 学生ボランティア
企画の立て方、運営、リスク管理などイベント実施について多方面で学生にレクチャーを実施できた。
今年は、下見を徹底し、その重要性について特に詳しくレクチャーした。
- ・ 関係団体（NEW）
自然環境保全、地域活性化、地域の魅力の再発見・発信など山から海にかけてさまざまな団体とあたららしい団体間連携が見えた。

◆苦勞した点

- ・ 学生のスケジュール調整
バイトや授業などで、特定の学生ボランティアが集中して参加するという点が難しい。また、資金的にも旅費や若干の謝金をまかなう点が困難である。
- ・ メディアPR
記事の都合に左右されるので、新聞や地域コミュニティ紙にいつも取り上げていただけていない。
- ・ 参加者
8 月のイベントが参加者不足で実施できなかった。広報力に課題が残る。

◆今後の課題・発展の方向性

- ・ 広報力のレベルアップ
関係団体との連携など互いに協力できる体制構築を検討する。
- ・ 学生ボランティア
継続して育成し、会のメンバー確保や体験活動全体のレベルアップにつなげていく。

◆活動を終えての感想・意見等

若干のケガ事例などはあったが、無事イベントを終了できて一安心である。支援いただいたことで、多くの参加者に宮島の楽しさ、現状を伝えることが出来たと考える。
今後も、継続して取り組んでいきたい。

活 動 名	No.21	団 体 名	絵本と紙芝居の地域文庫
絵本と紙芝居の地域文庫		地 域	広島県広島市
		代 表 者	代表 谷本 幸子
		支援金額	25 万円
活動概要	「絵本と紙芝居の地域文庫」における活動の目的は、読書活動を通して地域の子どもの健やかな成長を支援することである。その一方で、子ども時代における様々な経験は大人になっても忘れることができない、むしろ、その経験が支えとなることが多くあるように思われる。つまり、子ども達が地域との関わりを持つということは子ども達自身が成長していくうえで大きな糧となるのではないかと考える。そして、地域のなかで育ったという経験によって子ども達が大人になったときに、今度は、地域の子どもの成長に自発的に関わっていただくことに繋がると良いな、という願いを持っている。 2017 年度の主な活動は以下の通りである。 1. 「ゆっ子おばあちゃんのいろは文庫」開設 2017 年 4 月 1 日開設。 2. 「安佐北区久地南児童館でのおはなし会」開催 月 1 回絵本と紙芝居のおはなし会を実施(8 月、12 月を除く) 3. 「みんなのおはなし会 15 周年記念誌」刊行 2018 年 3 月 31 日刊行。		



「みんなのおはなし会 15 周年記念誌」を刊行しました



「ゆっ子おばあちゃんのいろは文庫」開設祝いのお花が届きました



「ゆっ子おばあちゃんのいろは文庫」活動拠点の入口です



「ゆっ子おばあちゃんのいろは文庫」はここを拠点に活動しています

◆実施に伴う効果

「ゆっ子おばあちゃんのいろは文庫」を団地内で開設したことにより、団地住民の中で子どもの読書の重要性が再認識された。また、地域全体で子ども達の成長を支援するという意識が高まった。その一方で、支援者である大人にとっての生きがいくくりにも繋がる等、支援される側の子ども達と支援する側の大人達とのより良い関係づくりの契機となった。それによって、自治会主催の行事の参加人数が増加するなど、町づくり（町内づくり）の一端に寄与する効果が見られた。

「安佐北区久地南児童館でのおはなし会」については日本独自であり世界では見られない、紙芝居を軸に展開した。子ども達の様子を見てみると、紙芝居のお話のみならず、紙芝居を設置する紙芝居舞台そのものに非常に興味・関心を持ってくれたようであった。元々、紙芝居の紙を抜き差しする「引き」という行為は、日本家屋の引き戸の文化から生まれたものだと言われている。子ども達が日本文化に関心を寄せるきっかけとなった。

「みんなのおはなし会15周年記念誌」刊行については、読み手の方々が自身の活動を振り返る中で読み聞かせの絵本についてなど、もっと勉強をしたいという意欲に繋がった。

◆苦勞した点

1. 「ゆっ子おばあちゃんのいろは文庫」について

- ・開設にあたり、まず、PRに力を入れた。近隣の幼稚園、保育園、小学校などに文庫開設のチラシを持参した。PR活動には、地道な努力が必要である。
- ・運営にあたり、少しでも多くの子ども達に参加してもらえるように、活動日の設定に対して試行錯誤している。子ども達の状況を見ながら、今後、活動日の日時を検討する必要がある。
- ・現在、文庫のスタッフは5名程度であるが、大人の参加者の募集にも力を入れたい。

2. 「安佐北区久地南児童館でのおはなし会」について

- ・児童館でのおはなし会であるため、参加してくれる児童も1回に約60人程度と多い。また、学年も様々なため、読み聞かせる絵本や紙芝居の選定に工夫が必要。
- ・放課後の時間であるため、子ども達がホッとでき楽しく参加できる雰囲気作りに配慮が必要。

3. 「みんなのおはなし会15周年記念誌」刊行について

- ・記念誌を通して子どもの読書活動の重要性が伝えられるような記念誌作りを行った。15年間に読み聞かせた絵本と紙芝居のリスト作りに取り組んだが、15年間分をいっきに纏めるのは大変な作業であった。記念誌作りや活動の記録作りは、5年ないし10年で制作するのが良いと感じた。
- ・記念誌の刊行が、子ども達の読書活動の充実に関係するということを周知することに努めた。
- ・実際に制作に取り掛かる中で、より良いものを作りたいという意欲が関係者からもあがるなど、予定ページを大幅に超える冊子となった。計画予算も大幅にオーバーしたため、今後は、予算の立て方に工夫が必要である。

◆今後の課題・発展の方向性

3つの活動を通しての共通の課題としては、子ども達の読書活動に対する支援で最も配慮する必要がある点は、子ども達を取り巻く環境を十分に認識したうえで、子ども達との関係性をどの様に築いていくか、ということである。1970年代全国的に文庫が数多く誕生していった背景には、テレビ・マンガ文化の台頭に対する危機感があった。その後、テレビゲーム、インターネット等、子ども達を取り巻く環境が変化すると共に、常に、子ども達の健やかな成長を願うという側面から子どもの読書の在り方が注目を集め、子どもの読書活動を豊かにしていこうとする社会的な動きがあったと思われる。これは、子ども達の健やかな成長を願う大人たちの願いによるものである。よって、今後は、専門的な知識や技術の修得のために、外部から講師を招きより高いレベルでの活動を志したい。

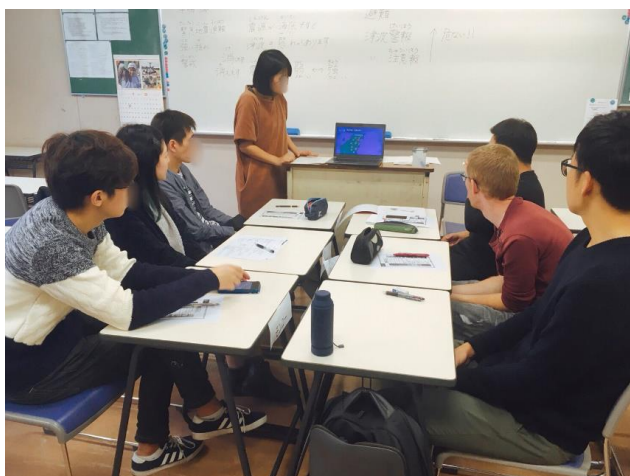
絵本と紙芝居の地域文庫としての3つの活動の中心的な担い手は、60代以上であり、今後、どの様に後継者を育成するかが重要な課題である。そのために、今後、地域の大人の方々に向けた勉強会を実施し、子どもの読書の重要性を伝えながら後継者の育成に力を入れていきたい。

◆活動を終えての感想・意見等

マツダ財団様には惜しみないご支援をいただき、本当にありがとうございました。助成を受けていなければ、きっと、文庫の開設と15周年の記念誌の発刊は実現していなかったと思います。物事を行っていくとき、資金、人、物、等を整えていくことが重要であると思いますが、何より一番重要なことは、「やらねばならない!」という強い意志を持てるかどうかだと思います。つまり、ご支援をいただけたことが、精神的にも大きな支えとなり、お陰様で悔いのない活動を展開することができたと自負しております。

最後になりましたが、この報告書と共に「みんなのおはなし会15周年記念誌」を謹呈させていただきます。

活 動 名	No.22	団 体 名	日本語教室ピース
広島県居住の外国人に対する日本語学習機会の提供と異文化理解を深める交流		地 域	広島県東広島市
		代 表 者	代表 吉村 咲希
		支援金額	10 万円
活動概要	私たちは、主に広島市内に住む外国人を対象に生活に必要な日本語をボランティアで教え、彼らの生活を言葉の面で支援することや、教室に集まる外国人同士、または外国人と日本人との交流を通して、異文化理解を深めることを目的とし、毎週土曜日に日本語教室を開催している。授業内容としては、日本での生活で役立ち、普段の生活にも反映できるようなテーマや、学習者同士、さらに、教師も交えて楽しく会話できるようなテーマを取り入れている。また、外国人居住者の生活を言葉の面で支える他に、日本語教師を目指す学生が日本語ボランティアを通じて実践的な日本語教育を学んでいる。		



上級クラスの災害の授業の様子



ゼロ初級クラスの個別授業の様子



七夕イベントで作った七夕飾り



宮島小旅行での集合写真

◆実施に伴う効果

無償で提供している日本語教室の為、広島市内に在住している外国人から感謝された。また、財団からの支援により、七夕やポスター発表、持ち寄りパーティーなどのイベントや行事を実行することができた。これらのイベントは準備から実行まで広島 YMCA 専門学校と共同で行ったものであるが、イベントにかかった費用は YMCA 及び日本人、外国人を問わず参加者から徴収することなく実行することが可能であった。これにより、例年と比較してより多くの参加者が集まったことから、YMCA の学習者、並びに本団体の活動に参加している外国人にとっても、一層イベントに参加しやすくなったのではないかと考えられる。

◆苦勞した点

学習者である外国人の数の減少が挙げられる。帰国などのやむを得ない理由が大半ではあったが、学習者があまりにも減りすぎてしまうと今後の活動が難しくなってしまうという厳しい状況であった。そこで私達は、学習者の数をさらに増やすため、授業だけでなく、外国人に気軽に参加してもらえるようなイベントの開催にも取り組んだ。7 月には七夕のイベントを行い、七夕に関するクイズや短冊書き、笹の飾りつけを通して、楽しく日本文化に触れてもらった。12 月には宮島への小旅行を行い、スタンプラリーを楽しんだり、もみじまんじゅうの手焼きを体験したりした。また、教師の数の減少も挙げられる。私達は、ボランティアの活動期間中はほぼ毎週授業を行っている。そのため、準備に時間がかかる授業を少ない教師数で毎週行っていくのは非常に難しい状況であった。そこで私達は教師数を増やしたいと考え、団体の PR に取り組んだ。大学内の掲示板にチラシを掲示したり、ピースの活動報告会を行ったりした。その結果、他の学部・学科の人に興味を持ってもらうきっかけに繋がった。

◆今後の課題・発展の方向性

発展の方向性など今年度は教師不足により、本団体に所属するメンバーの負担が非常に大きかった。来年度は就職で引退するメンバーや現在中核を担っているメンバーが就職活動や様々な試験の勉強などで参加困難になることが判明している。そのため今年度は、新たな教師を募集する呼びかけを積極的に行った。具体的には、本団体の活動報告会を大学内で行って様々な学生に本団体のことを広める活動を行うなどである。その結果、10 月からは多くの見学者に授業に参加してもらうことができ、より多くの人々に本団体のことを知ってもらうことができた。来年度はより積極的な募集の呼びかけをしたり、定期的に活動報告会などを開いたりしてより多くの人々に本団体の活動内容を知ってもらいたい。また、来年度から新たに教師を担当するメンバーがいることから、本団体は来年度より大きくメンバー交代がある。来年度は、今年度とは違うことや例年とは違うことにチャレンジするチャンス of 1 年になり、今年度よりも実りのある変化の年になることが予想される。メンバーが変わることで、一団体としてさらにいい方向へと発展していきたい。

◆活動を終えての感想・意見等

今年度の授業の参加者は YMCA の学生が非常に多く、参加メンバーのほとんどが知り合いであることが多かった。そのため、授業の雰囲気づくりに苦勞することは少なく、参加者からの発言も多く非常に積極的で、最初から最後まで盛り上がるような授業を展開することができた。また、毎週来てくれるメンバーも多く学習者と日本人同士の仲が非常に良く、授業外でも話したり学習者の母国語を教えてもらったりするなど国際交流ができた。また今年度は教師を担当できるメンバーが少ないこともあり、突然参加できなくなったメンバーの授業を進んで担当したり、授業担当のメンバーの教材づくりや授業内での学習者の質問への対応なども手助けしたりするなど、メンバー同士での助け合いの場面が多く見られた年でもあった。さらに今年度は、初めて授業をするメンバーやまだ授業経験の少ないメンバーのために年長メンバー一人ひとりが自分の授業教案の作成の過程や教授方法を共有したりして新メンバーに助力するこれからも今年度と同様にメンバー同士で助け合いながらより広島に住む外国人に寄り添った活動を続けていきたい。

活 動 名	No.23	団 体 名	高校生災害復興支援ボランティア派遣隊
広島と石巻の被災地を結ぶ学生ボランティア交流会 （災害の教訓を伝承する活動を通して）		地 域	広島県広島市
		代 表 者	サポーター代表 日上 雅義
		支援金額	25 万円
活動概要	私たち高校生災害復興支援ボランティア派遣隊は、東日本大震災や広島市土砂災害の被災地で復興支援活動に取り組んでいます。被災地を外側から見ると、かなり復興が進んできたように見えます。しかし、一歩被災地に足を踏み入れると、そこには外側からは見えないさまざまな問題があることが分かります。いまだ癒されない喪失感、日に日に増してくる孤立感、世間の意識とのギャップ、被災された多くの方々がつらい思いに耐えながら暮らしています。 高校生災害復興支援ボランティア派遣隊は、現在、宮城県石巻市で活動している「チーム大川」と交流しながら、互いに励まし合って活動を進めています。チーム大川は、東日本大震災で大川小学校の卒業生（津波で生き残った生徒を含む）や、亡くなった児童の家族などが中心となって結成したグループです。チーム大川のみなさんは、原爆ドームの保存運動をモデルにして、旧大川小学校の校舎を震災遺構として保存・伝承する活動を始めたばかりです。 私たちは、東日本大震災や広島市土砂災害の被災地で復興支援活動に取り組んでいます。が、「広島と石巻の被災地を結ぶ学生ボランティア交流会」も並行して行い、それぞれの被災地域で実施する研修や実践報告、課題解決のための協議、共同プロジェクトの企画運営などの活動を通して、災害の教訓を伝承するという取り組みも実践しました。 このような学生たちの地道な活動がそれぞれの地域において被災体験の伝承や防災教育に役立つとともに、被災地の方々を勇気づけることつながればと願っています。		



石巻市・被災地学習会にて大川小学校訪問



南相馬市・被災地学習会にて大鹿仮設住宅でお話を聞く



登米市・高橋勝子美術館にて音楽ライブ



石巻市・三反走仮設住宅にてお好み焼きを焼く

◆実施に伴う効果

チーム大川とは、2016年度から互いに広島と宮城を行き来しながら交流を続けています。2017年度も、当初は5月は石巻、8月は広島で交流会を開催することを計画していましたが、チーム大川に所属するメンバーの多くが進学・就職活動と重なってしまい、広島での開催は中止となり、年2回計画していた交流会はいずれも東北での開催となりました。しかし、東北各地での開催が増えたことで、逆に初めて訪れる場所も多くなり、お互いにとても貴重な経験となりました。

また、東北の被災地では、復興がかなり進んだ地域もありますが、未だに7万人の方々が避難生活を送っており、本来は2年が年限となっているはずの応急仮設住宅も未だに存在し、多くの方々が劣悪な環境で暮らしておられます。高校生派遣隊やチーム大川の若いメンバーたちは確かに微力かもしれませんが、逆に、何ものにも代えがたい力を持っているのも事実です。特に南相馬市の仮設住宅にはお年寄りが多く、「遠い広島から孫が来てくれたね」と喜ぶ人、チーム大川が同じ被災地である宮城から来たと知ると「自分たちも大変なのによくしてくれたね」と驚かれる人も多くいました。広島と宮城の若者が協働して行う活動にはとても意味があると感じられました。

◆苦労した点

前述のとおり、チーム大川の事情で当初の計画を見直さざるをえなくなり、高校生派遣隊としても年に2度の派遣ということで大変な出費となってしまいました。また、参加メンバーも経費の関係で絞らざるをえなくなり、モチベーションを維持することが難しい場面もありました。相手もあることなので、計画どおりにはいかないこともあらかじめ想定して、代替案をしっかりと検討しておかなければならないと反省しています。

私たちは2013年から5年間の活動をしてきました。おかげさまで東北や広島の被災地でも、多くの方々に活動を認知していただき、また企業や団体に支援を受けることができたり、同じボランティア団体にもサポートをしていただいたおかげで、ここまで継続して活動することができています。ただし、東日本大震災から7年が経過し、災害が風化するという現実もあり、なかなか一般的な理解を得られるもの難しくなり、人的にも予算的にもこれまでどおりの支援活動を継続していくこと困難になっており、活動の範囲を再検討する時期に来ていると考えています。

そこで、高校生派遣隊は、被災地の若者どうしの交流、被災体験の継承というテーマを設定して、取り組みを始めたところです。現在は、広島と宮城のメンバーどうしで、互いに交流しながら経験したことを語り合うという段階です。まだ、代表である私の力不足もあり、また、メンバーも学校生活・進学・就職のための活動が忙しく、将来を見据えての活動ができる状態にはまだなっていません。今年度、十分にできなかった被災体験の伝承というテーマについては、引き続き検討を重ねていきます。

◆今後の課題・発展の方向性

被災から年月が経過すれば、当然私たちの活動の範囲も縮小していかなければなりません。また同時に、被災地域の自立という大きな課題もあります。

私たちが活動させてもらっている広島市土砂災害の被災地「県営緑ヶ丘住宅（広島市安佐南区）」では、当初は私たちが中心となって慰霊式典や復興イベントを開催していました。しかし、現在は自治会が主体となって開催できるようになりました。しかし、私たちの活動に対するニーズ（音響機器の貸出し・お好み焼きや音楽ライブの実施）もまだまだあり、今後は規模を縮小しつつも細く長く継続して関わっていくことがとても大切だと考えています。

現在、高校生や大学生のメンバーたちが卒業して就職したり、あるいは家庭を持ったりしても、活動できる場を確保しておくことが現在の課題の一つであると考えています。また、私たち家族が事務局を行っているような場合、家庭の事情で活動の範囲を狭めたり、活動を休止したりすることになってしまうので、そうした事態に陥らないよう、高校生派遣隊OBのメンバーにも積極的に関わってもらえるように環境を整備していきたいと考えています。

◆活動を終えての感想・意見等

今回、南相馬で活動した時に「どういうわけか広島からボランティアに来る人がたくさんおられるんですよ」という声を何度も聞きました。広島は被爆を経験しているので、やはり原発事故の影響を受けた福島への理解も深いのではないかと思います。ボランティアの数も激減する中、年に1回とはいえ、継続して支援を行うことはとても重要で、これからも高校生派遣隊として、できるだけ東北に高校生を引率していきたいと考えていますし、また、個人的にも支援活動をできるかぎり続けていきたいと考えています。今回、貴財団に支援をしていただいたおかげで、被災地で多くの人々と新たな絆を結ぶことができました。心から感謝を申し上げます。

活 動 名	No.24	団 体 名	絵本たねまき塾
出前絵本たねまき広場		地 域	広島県広島市
		代 表 者	代表 大平 秀雄
		支援金額	20 万円
活動概要	絵本にあまり興味や関心が無い方、図書館に行きたくても行けない人、どんな絵本をよめばよいのか分からない人、図書館へ行って絵本に接しない方を対象に、移動図書館と称して、屋外の公園や広場へ出かけ、その隅にテーブルを4台準備し、その上に約150冊の絵本を展示します。絵本の種類は赤ちゃん絵本から高齢者の方までが楽しめる多種多様でしかも質の高い絵本を準備します。黄色いテントを建て「出前絵本たねまき広場」と言う遠くからでも良く見える横断幕を掲げ、公園や広場にいる方へ興味関心を持ってもらうように働きかけ、訪れる方に「絵本との素敵な出会い体験」を味わっていただく機会を提供する活動をしました。不特定多数の方を対象に絵本の読み聞かせの実演をしたり、絵本が果たす役割や可能性等について説明したりしました。参加者が質の高いすぐれた絵本に触れることを通して、豊かな感性や感受性、また想像力や思考力を取り戻すヒントやきっかけづくりを促す活動をしました。また、屋内では公民館や集会所等の公共施設を借りて、子育て中のママから高齢者の方を対象に素敵な絵本との出会い体験活動をしました。約150冊の絵本から新たな発見や気づき、豊かで幸せな時間と空間を共有できる絵本の種まきをしました。(小学校や公民館等でも絵本活動をしました。)		



◆実施に伴う効果

- ・ 絵本が好きな人は、自ら絵本に親しむ機会をもっているが、そうでない方に絵本に出合い触れ合う機会をたくさん作ることができた。子育てママに絵本は「親と子どもの心の広場」だと気付いてもらったり、お薦めの本を紹介したりした。大人の方には読み聞かせやミニ絵本講座において絵本は子どもの物だけではなく、大人でも絵本が楽しめる（絵本の魅力）きっかけづくりを提供することができた。
- ・ 舟入小学校や中島小学校などの学校図書館ボランティアの方に、「絵本に対する読みが深まった」「読んでもらうことで、絵本のよさに気づいた」などの感想をもらい、絵本が大人の心にも響くすばらしいものであるという意義や意味を新たに認識してもらい、今後の読み聞かせ活動の参考になると感謝された。
- ・ 70歳以上の高齢者の方が絵本に触れ合う機会をもってもらった場合（文化活動）には、広島市の「高齢者いきいき活動ポイント」の対象事業として1ポイント付与し喜ばれた。

◆苦勞した点

- ・ 屋外の公園や広場の場所をどこにするのか、場所の選択に苦勞しました。
- ・ 活動を主に、土曜日から日曜日にしていましたが、ちょうどその日に一日中雨が降ったり午前中雨午後曇りになったり、または午前曇り午後雨など天候に左右されることが多く予定通りに実施できなかったことが多かったです。
- ・ とりわけ、今年の夏の時期は暑すぎて、冬の時期は寒すぎて、公園や広場を訪れる人が少なかったようです。しかし、11月頃さわやかな秋風が吹き始めると公園や広場を訪れる人が少しずつ増え始め、絵本広場をオープンして活動ができました。
- ・ 音楽を流し絵本を展示して参加者を待っているだけでは、なかなか人は集まってきません。近寄ってくる方は少数です。不特定多数の方を対象に絵本活動をしていると、中には、絵本を売る商売、物売りではないかと勘違いをされている方、また、公園や広場に遊びにきているから興味や関心が無い方がたくさんいました。参加者を増やすために、こちらから声をかけて人集めをするのに苦勞しました。
- ・ 屋外での絵本活動は天候に左右されることが多いので、公民館や集会所等で「出前絵本たねまき広場」を実施することもありました。参加者を集めるためにチラシをつくったこともありますが、チラシの効果はあまり期待できないことが分りました。
- ・ 他の団体からの依頼を受けて絵本講話をする場合もありました。その際は約150冊の絵本を携えて、「絵本たねまき広場」も開催しました。私からみるといずれの絵本も魅力的で素晴らしいのですが、絵本が多すぎるために、参加者が絵本選びに困惑される場面に遭遇しました。もう少し絵本の数少なくし、ジャンル別やカテゴリー別に展示したり、お薦めの絵本のレビューを書いたりするなど参加者の目線で展示することの大切さに気づきました。

◆今後の課題・発展の方向性

- ・ 参加者に絵本の魅力の体感をして頂くと同時に、絵本の素晴らしさに気づいて頂きましたが、その場限りの表面的な受け取り方をする人がたくさんいました。子育てママに絵本で子育てをする事の大切さを話しても、シンパシー（共感）が得られたママは少なかった。
- ・ また、大人の方に「絵本を読んでもください」と言っても「絵本なんて子どもの読むものだ」というバイアス（偏見）が先に立ち、絵本に興味がある人は多いとは言えないことが分った。
- ・ 絵本に興味がある人は、各自でコミュニティを作り絵本の世界を楽しんでいるが、興味が持てない人に読み聞かせや説明をし、絵本のよさをいくら訴えても十分に伝わらず、その場限りの対応に終始しているように伺えた。これはその人の感性の問題で、感性が豊かな人には共感を得られるが、そうでない人が多かった。今後は、不特定多数の方が絵本と出合うきっかけづくりとして、講座やワークショップなどを開いて絵本文化の普及に力を注いでいきたい。

◆活動を終えての感想・意見等

2年間支援金をいただいたおかげで絵本活動を実践することができ感謝の気持ちで一杯です。活動に必要な手持ち絵本が揃うと同時に、活動場所も確保できたので、今後の活動は自立して継続できる環境が整いました。この2年間で小さな一歩が築けたので、さらにこの活動を継続発展していき、絵本文化の輪を広げていかなければという使命感と責任感が湧きあがっています。この2年間本当にありがとうございました。貴社の発展と活躍を心よりお祈りいたします。

活 動 名	No.25	団 体 名	岩国市立通津小学校おやじの会
子ども時代をもっと楽しむ体験づくり		地 域	山口県岩国市
		代 表 者	会長 相葉 善隆
		支援金額	15 万円
活動概要	子どもたちが楽しく、時に努力を伴う活動に参加することで、記憶に残る「子ども時代」を過ごし、地域、ひとに愛着を持ち、かつ、主体的で実践力のある人間に育っていくため、次の活動を行います。 ①ピザ釜製作とイベントでのピザ調理と販売 ②老朽化したカヤックの修理とカヤック操舵（カヤック乗船体験）		



新聞に取り上げられました



カヤック乗船体験(夏フェス)



ピザ窯ができました



ピザ窯行列(通津小まつり)

◆実施に伴う効果

小学校のイベントをカヌーやピザ窯を活用することで、子どもたちを今までよりワクワクさせる（カヌーに乗って大喜びの子どもたち、ピザの順番を待つ子どもたち、そして完売、等）ことができた。さらにその子の家族が参加することで、父母、祖父母、中学生や幼稚園、保育園の兄弟姉妹も一緒に楽しむことができた。また、カヌー修理やピザ釜制作で多くの父兄や地域の人、公民館とも繋がることができた。これによって、今後さらに子どもたちの記憶に残る「子ども時代」を支えていく基礎ができた。

◆苦勞した点

カヌー修理もピザ窯制作もメンバー全員初めてで調べながら作業し、イメージ通りできないこともあった。また、休日を作業に充てたが、イベント直前はほぼ毎週作業となり、時間的な困難さがあった。

◆今後の課題・発展の方向性

まずはどんどん活用したい。ピザ釜などはスポ少や地域の方など、イベント時に使っていただき、小学校での交流を進める手段にしていきたい。

海も川もある地域なので、自然の中でカヌー体験を行いたい。

記憶に残る「子ども時代」を支えるため、魅力的な事業を行なっていきたい。

◆活動を終えての感想・意見等

今回の事業はどれも子どもたちから喜びの声をもらえた。子どもたちは日常を楽しみたいと思っているんだと痛感した。今あるものや環境を生かして、おやじたちの少しの努力で子どもたちを楽しませていきたいと思った。

また、一緒に活動してくれるおやじたちがたくさんいた。おやじたちもいい時間を過ごせたと思う。このことが子どもたちと地域をさらに繋いで、みんなが楽しい地域になる力だと思った。

活 動 名	No.26	団 体 名	滝びとの会
「東滝町の謎に迫る！～わが町に「ため池」はあるのか！？～」		地 域	山口県山口市
		代 表 者	会長 坂本 京子
		支援金額	25 万円
活動概要	今年で3回目となる、東滝町内会の防災訓練「ぼうさいカフェ」です。 <ぼうさいカフェ準備> ①事前に裏山散策で「ため池」の場所を確認 ②ドローンを飛ばして、裏山にある「ため池」の撮影・編集 <ぼうさいカフェ実施> ③「ぼうさいカフェ」でドローンのデモンストレーション ④編集した映像の上映会 ⑤ワークショップ DIG「図上訓練」 ⑥発表 ⑦地域のお医者さんによる、キッチン用品で応急手当 ⑧炊き出しのカレーランチ		



ドローンデモ飛行



防災カフェ



防災カフェ図上訓練



防災カフェ発表

◆実施に伴う効果

- ・ 何よりも、土砂災害はないと思い込んでいた住民の意識が変わったことです。話で聞くのと、実際に映像で見るのは大違いで、ため池の存在を「見える化」することによって、一人ひとりに危機意識が芽生えたと思います。
- ・ ぼうさいカフェ自体も、ドローンを飛ばすというエンターテインメント性あふれる内容と、町内会初の炊き出し訓練（食事）の実施で、楽しく防災について学ぶ場だけでなく地域の交流ができる催しとして浸透したと感じます。
- ・ マツダ財団からの支援があり、3年目にふさわしい大きな企画が打ち上げられたことで、思い切って、町内の枠を超えて両隣の町内にも声をかけ、参加してもらいました。災害時には他町内との連携も大切なので、そのきっかけづくりができました。秋には招待した2つの地域から、逆に防災訓練と研修に招待され、お互いの地域交流が活発になったことは大きな前進で、災害時の強みになります。
- ・ 今回、ドローンを飛ばす場所の選定で、地域にあるお寺に相談をしたところ、事情を聞いて炊き出しの場所を快く貸していただけることになり、思わぬ収穫を得ることができました。
- ・ 大きな企画をやり遂げた達成感を味わうことができ、自主防災組織のメンバーのやる気につながりました。

◆苦労した点

「ため池」の存在を確認するためにドローンで撮影したものの、その「出口」をどうするかという点が一番悩みました。映像を見て終わりではなく、もし大雨が降ったらどうなるかを考えてもらうために、図上訓練を取り入れることにしました。図上訓練は地域の方には馴染みがないので、事前に役員を集めて、リハーサルをやってみたりもしました。地図は東滝地域のものを用意しましたが、大きな地図にしたかったのでその準備に手間取りました。結局、公民館が市役所を通して印刷をしてくれました。

初めての「炊き出し訓練」は女性のみにも声をかけました。しかし、会長である私が全体の指揮に忙しく、炊き出しのリーダーを作らなかつたので、女性陣は不安が大きかったと思います。主婦の集まりなので、何とかなるだろうという考えが甘かったと反省して、直前になってリーダーをお願いしたという経緯があります。ただ当日は当初の予想の3分の1の時間でカレーを完成させて、やはり主婦パワーは素晴らしいと感服しました。

◆今後の課題・発展の方向性

日程を慎重に決めることです。地域住民は様々な年齢層で構成されているので、学校行事や他地域の行事など、全てに配慮する日程がなかなか設定できませんでした。特に今回はドローンをあげて、大雨災害の可能性を示唆することが目的だったので、どうしても梅雨の前半までにやりたいという思いがあり、周りの事情が考慮できませんでした。今後は、事前にアンケートをとるなどして、少しでも多くの人が参加できる日を設定したいです。

今後も「ぼうさいカフェ」は続けていきます。このたびの大きな収穫である「災害や防災について見える化すること」「お寺との連携」「女性の連携」を絶やすことなく、来年以降も活かし続けていきたいと思います。すでに来年は避難所運営について学ぼうという案が出ていて、リサーチに取り掛かっています。

◆活動を終えての感想・意見等

助成をいただいたということが大きな励みになって、滝びとの会一同が一丸となって「ぼうさいカフェ」の企画・実施に奔走した夏でした。打ち上げ花火一発で終わらないように、これからも息の長い活動を続けていきたいと思っています。

助成金で購入したヘルメットは、その後各班長さんに引き継いでもらいました。また拡声器は町内会長が保管することになりました。すると、班長や会長さんから「いざというときは、真っ先に自分の班の（地域の）住民の安全を確認しないといけないのだという意識が芽生えた。」と言われ、防災備品を提供することも防災意識が高まりにつながるのだと大変嬉しく思っています。

小さな町の助成に採択をいただくことを心から感謝致します。防災は、県や市や地域という大きな単位ではなく、まずは町内（ご近所）という小さな単位でしっかり結束する必要があると思っています。地域の行事などとは縁のないお年寄りもしっかり参加して、命を守ることを考えていただけたと思います。本当にありがとうございました。

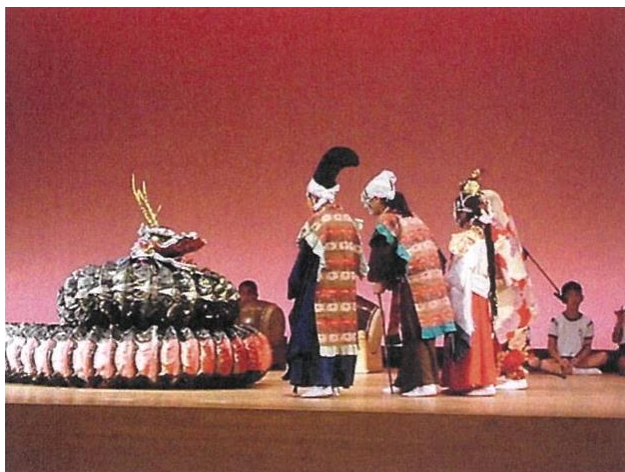
活 動 名	No.27	団 体 名	下三原上神楽舞伝承活動実行委員会
下三原上神楽舞伝承子どもプロジェクト		地 域	山口県萩市
		代 表 者	会長 平野 和正
		支援金額	25 万円
活動概要	過疎・高齢社会が益々進行する中で、地域を元気にしたいとの思いで地元育英小学校の児童達が、今は衰退し消滅した下三原上神楽舞を復活できないかと考え、子ども達の中で復活の機運が高まり、地域の有志、保護者等による伝承支援の輪が広がり、10年間神楽舞が途絶えた下三原上集落の皆さんもこれに協力、子ども神楽として一昨年(平成28年)復活する運びとなり実行委員会が発足した。子ども達は、夏休みを返上で練習に励み、昨年11月の地域の祭りで初披露、大喝采を浴びた。今年度は、昨年の反省を基に神楽の基礎基本から時間をかけて行うこととなり、子ども達が夏休みに入る7月から本格的な活動を行った。 また、昨年は下三原上神楽が所有する衣装を子ども用に仕立て活用したが、大人サイズでは、子どもの体型に合わず、石見神楽を指導する団体との連携により、石見神楽衣装を専門に作る業者が端切れ布を利用し、格安で衣装を作ってくれたことで、子ども達の機運も一層高まった。子ども達は、11月3日のふるさとまつりでの発表に標準を合せ練習を重ね、みごと昨年以上の発表をすることができた。須佐地域は、高校を卒業すると地元に残らない子どもが大半であり、過疎化の原因の一つでもあり、こうして子ども達が小さい頃から、郷里の伝承文化に触れることにより、郷土愛を育み、地域が連携し将来の須佐を支える人材の育成を行うことはとても大切な事だと考えている。また、小学校を卒業後、中学生、高校生になっても下級生の指導に参加してくれる子ども達になってくれることを期待している。そして、将来的には大人として指導、定住が目的でもある。		



笛の練習風景



舞の練習風景



本番前のリハーサル風景



ふるさとまつり本番を無事終えて

◆実施に伴う効果

子ども達の思いつきから始まった神楽舞の復活。当初は下三原上集落の皆さんも 10年間神楽舞が途絶えていることに指導者として良い返事を頂けなかったが、昨年一年経過してみると子ども達の前向きな取組みに対し、重い腰を上げられたように感じられ(本腰)、自らビデオ撮影(教材用)に取り組まれるなど、高齢化した集落も逆に明るい日差しが指し込んで来た気がする。

子ども達も暑い夏の時期、夏休み返上で頑張っている姿は、指導者にも共感を与えるものがあつた気がする。また、石見神楽を舞う隣の神楽団の協力で、端切れ布ではあるが格安に子ども衣装を作成することができたことは、神楽を舞うもの同士のネットワークを感じるとともに、本当に感謝している。

いずれにせよ、子ども達が輝く姿は、地域に元気をもたらす起爆剤の一つとなった。特に豪雨災害(H25.7.28山口県北部豪雨発生)以降、明るい話題がなかった須佐地域には、4年目ぶりに子ども達が元気を運んでくれた。また、子ども達が活躍する場を作ることで、小さな集落が動き出し、最後には大きなうねりとして地域全体が動き出した。まだまだ船出したばかり、これからも何度か暗礁に乗り上げることが予測されますが、神楽舞で培ったネットワークを大切に、やがて、この子ども達が次の指導者となり、地域に帰ってくることを期待したいものです。

◆苦勞した点

① 行事日程調整

児童及び指導者との日程調整では、主な練習は9~10月に集中しており、指導者の大半は農業従事者で9~10月は農繁期である。一方子ども達は昼間しか動けず、双方の調整に難があつたが、指導者の方でビデオ撮影をされ、それを教材として活用されたことは有難かつた。また、自営業の方が指導者として学校の都合に合せ笛の練習ができたことは良かつた。

② 文化財に対する学習と意識の大切さ

単なるイベントとして神楽を舞うのではなく、地域の伝統文化を後世に引き継ぐことの難しさをどのように子ども達に教えて行くかが非常に難しい。また、蛇頭や蛇胴など壊れやすい道具も多く、扱いの方法を教職員と共に共通理解することが難しい。

③ 伝統文化の継承

下三原上に継承される神楽であるが、10年間のブランクは大きいものがあり、舞い方でもどこまでをアレンジして良いのか分からない。同じ石見神楽であっても伝承方法や受取がまちまちである。できるだけ下三原上集落に伝承した形をそのまま継承していきたいと考えている。

④ 神楽衣装の調達

下三原上神楽の衣装は古く、子どもサイズで仕立てるには難がある。しかし、衣装を買い求めるには子ども衣装とはいえ100万円あつても買い揃えることは難しい状態であつた。しかし、石見神楽を舞う島根県益田市の神楽団とのネットワークで神楽衣装の端切れ布で、子ども衣装を格安で制作してもらうことができた。これは、努力の賜である。

◆今後の課題・発展の方向性

今年度から、伝統芸能(下三原上神楽舞と上三原の田植えばやし)を継承する学年を3年生から6年生までとして、子ども達はどちらかの芸能を選択できるようにした。昨年までは、3.4年生が田植えばやし、5.6年生が神楽舞(1年間)であつた。しかし、上から下に教えて行くという工程を考えると4年間で一つのものを極める方が効率的に良いこともあり、今年から変更した。

また、児童数の減少や指導者の高齢化が今後の課題ではあるが、若い世代も若干おり、一つずつ学び、継承する方向性に向いている。将来的には、卒業していった中学生・高校生がこれの指導に関わってくれることを望んでいる。

◆活動を終えての感想・意見等

単なるイベントで終わるのではなく、あくまで基本は「次代を担う人材を育成する」ことである。難しいことではあるが、子ども達の発想を活かし将来の人づくりに活かしていくことを痛感した。また、神楽を通して人と人とがつながる地域をめざし、これからも焦らずに一步步前に進むことから始めたいと考えています。色々ご支援ありがとうございました。

活 動 名	No.28	団 体 名	公益社団法人 防府青年会議所
「にっぽんのこころ」を育む宿泊型青少年開発事業		地 域	山口県防府市
		代 表 者	理事長 梅本 洋平
		支援金額	25 万円
活動概要	近年、青少年の道徳心の低下やSNS等でのいじめ問題など、青少年を取り巻く社会問題が叫ばれております。それは、情報技術の発達によってインターネットやSNS等を通じてグローバル化が進んだことにより、本来の日本人が大切にしてきた考え方とはかけ離れた、利己主義や個人主義といった自分さえよければいいという考え方が社会に浸透してきているという問題があるからです。今こそ未来の国やまちを担う青少年に日本が大切にしてきた精神性や心を伝える必要があります。		



カッター訓練研修風景



回天記念館見学風景



先人たちの想い研修風景



集合写真

◆実施に伴う効果

参加者を中学2年生から高校2年生と世代の幅を広くしたことにより、体力や理解力に差がある中で参加者に対して研修が伝わるように事業を組み立てることに大変苦労しました。しかし、参加者はきちんと研修の意図を汲み取り、それぞれの研修に臨んでくれました。その結果、参加者一人ひとりに他を慮る心が醸成されました。また、先人たちの行動や想いを通じて、参加者に対して日本人であることに誇りを感じることができる歴史認識をしていただくことができ、自国を誇れる国家観を醸成することができました。そして、事業を通じて世のため人のために生きていかなければならないという意識を参加者へ芽生えさせたことにより、自分が何者を目指すのかという人生の道の上を、徳を積みながら生きていき、他を慮る道徳心を備えた大人へと成長していってくれます。

◆苦労した点

参加者36名を募集するために市内中学校・高等学校へチラシの配布、防府商工・高川・誠英のインターアクト研修会、菅公みらい塾、防府海北園などへ訪問し事業PRを行いました。結果的に28名の参加となり目標の36名に達成することができませんでした。

◆今後の課題・発展の方向性

中高生を対象に宿泊研修を開催する場合は、部活動が活発な時期は参加者を集めるのに非常に苦労するので、今後は開催時期を十分に考慮して選定する必要があると感じました。また、JAPAN PRIDEに参加した高校生が万灯の夕べ（防府JC主催）にボランティアとして参加してくれるという、大きな広がりを見せる事業となりました。

◆活動を終えての感想・意見等

この度のJAPAN PRIDEでは、10年後にこのまちを支える青年に対して、日本人の心である「他を慮る心」を伝えることで、調和や秩序が保たれた社会を創造していく人材へ成長していくと考え、中学2年生から高校2年生という人生の岐路に立ち様々な影響を受けやすい世代に対して事業を開催いたしました。また、防府JCが長年培ってきた青少年事業のノウハウを織り交ぜ、中高生を対象とした宿泊研修という新たな形での事業として企画いたしました。

まずは、調査段階で中高生という多感な年ごろである世代に、日本人の心を伝えるためにはどのようなフローやプログラムにしなければならないのかを、教育委員会や青少年育成市民会議の委員の方々などへヒアリング行い、委員会にて協議することからはじまりました。ヒアリングした内容をもとに、研修プログラムが幼稚ではないか、真剣に取り組ませるためにはどうしたらいいかなどの議論を重ねながら事業を企画して参りました。そして、参加者募集のチラシを市内の中学校、高等学校に配布しましたが全く応募の申し込みがなく、チラシの配布だけでは中高生はなかなか集まらないという参加動員計画の甘さに気づくこととなりました。そこで、中学校校長会や各高校の顧問の先生、ロータリークラブ様などに電話連絡や足を運び、少しでも参加者の応募に繋がるように、汗をかき必死に動員活動に尽力いたしました。そして、定員36名に対して28名の中高生に参加いただくこととなりました。目標の人数に達することはできませんでしたが、あきらめずに行動をすればかならず人の心に想いを届けることができるということを経験させていただきました。

また、事業本番では参加者がどのように変わっていくかを見てみると、研修が進むにつれて真剣に先人たちのことを受け止め、今の自分たちがあるのは先祖たちのお蔭であるという認識が芽生え、表情や態度が良い方向に変わっていきました。

スタッフからも参加者が宿泊研修を通じて成長をしていったという感想をいただき、むずかしい年頃であると言われる世代ではありますが、大人がきちんと向き合い言葉を届け導いてあげることで、真剣に受け止めて成長してくれる世代であるということは間違いないと確信いたしました。

JAPAN PRIDEを通じて青少年に育まれた日本人が大切にしてきた他を慮る心が多くの市民に伝わっていき、世のため人のために生きる生き方を市民が取り戻すことで明るい豊かな社会の実現にかならず繋がってくると確信しております。

活 動 名	No.29	団 体 名	板持 3 区自治会
板三夏祭り&板三もちつき大会 & 子供会と敬老会のコラボ		地 域	山口県長門市
		代 表 者	会長 橋本 憲治
		支援金額	15 万円
活動概要	板持3区には祭りなどの催事がなく、見かねた青年部が子供の為に、夏祭りを企画したのが30年前。今ではすっかり定着し、地区重要行事の1つとなっております。 そして30年前の子供達が、今日親となって夏祭りを引き継いでいます。自分達で作製した子供神輿が、更に夏祭りを盛り上げています。12月には、もちつき大会を企画し、子供達に日本文化の杵によるもちつきを体験させています。子が教え、孫がつき、できたもちを親がこねる、その出来たてのもちを孫がほおばる…昔懐かしい日本の風景。三世代交流の喜び、自治会の老若男女が1つの輪となり、次世代の子供達に伝承できればと考えています		



板三夏祭り



子供神輿が板持三区内を、練り歩きます



蒲鉾とベーコン作り（子供会と老人会のコラボ）



板三もちつき大会

◆実施に伴う効果

板三夏祭りや板三もちつき大会を開催する時、青年団がいつもしていることは、通行止めや迂回路や活動名を書いた看板を立てる事。しかし、板持3区には看板がないので、いつも他から借りていました。今回マツダ財団の助成金で、待望の看板を購入でき、青年団がとても喜んでいました。なお、この看板は毎年開催している避難訓練、美化ウォーキングにも使わせていただきました。

◆苦勞した点

子供会と敬老会のコラボ、板三もちつき大会の場合…

少子化でなるべく子供を参加させようと思っているのですが…

もう少し子供達が集まる予定でしたが、今の子供達は、塾やスポーツ少年団に忙しい毎日で、あいにく試合の日と重なったりで欠席者が多かったのは残念でした。

でも、参加した子供達は「楽しかった。また参加したい。」と大変満足していました。

◆今後の課題・発展の方向性

板三夏祭りの場合…

板三夏祭りは、子供達が沢山集まります。子供神輿は小学生が担ぐので、中学になると用がなくなる様なので、今年の夏祭りは、中学生にお店を1つ任せてみようかと思っています。自分達で企画し、販売するとなると責任感とやる気が出て、良い思い出になることでしょう。

◆活動を終えての感想・意見等

毎年予算がなく青年団や有志が寄付をしてどうにか成り立っていたのですが、今回マツダ財団よりご支援いただき、とても助かりました。ありがとうございました。マツダ財団の益々のご発展とご活躍をお祈り致します。

活 動 名	No.30	団 体 名	創作・風鎮神楽会
創作神楽による青少年健全育成		地 域	山口県防府市
		代 表 者	代表 古谷 忠隆
		支援金額	50 万円
活動概要	創作神楽で青少年健全育成 長州藩三白政策の 1 つである防府市西浦の新開作の築立を題材とし神楽を創作、その神楽を手段として、次世代を担う青少年達に、昔を生きた人達が、何に悩み、何を成し遂げてきたのか、過去を生きた教訓を学び、未来に向かつて勇気を持って生きることの大切さを防府市立華西中学校の生徒たちに伝える活動に取り組んできました。その手段である創作神楽・演目「毛利斉熙公と国の春」は、2015 年にスタート、まだまだ未完成のため、2017 年、継続してマツダ財団の支援を受けて青少年健全育成活動として取り組むことにしました。		



華西中学校での初舞台記事(ほうふ日報)



華西中学校での初舞台記事(山口新聞)



舞台風景



初舞台を終えて集合写真

◆実施に伴う効果

効果:その 1 青少年健全育成対象校・華西中学校校長先生のメッセージ。

「長州風鎮神楽を華西中で舞わせてほしい」との申し出があったのが、私が赴任して間もない 4 月 6 日であった。その後、協議を重ね、12 月 18 日(月)に本校の体育館で 1・2 年生と保護者・地域の方々の前で、長州風鎮神楽の上演が決まった。演目は、「毛利斉照公と国の春 J1600 年、関ヶ原の戦いに敗れた毛利藩は、藩再興のため三白政策を打ち出した。1628 年、防府市に最初の開作が造られ、以後、大小 61 の開作が造られた(公儀、拝領、自力、寺領鋪を含む)この神楽は、1824 年、撫育方による防府市西浦開作東・西野開作、約 150 町歩の築立状況を史実に基づき神楽化したものであった。当日は、予想を上回る来校者数で、正直驚いた。(生徒たちは、興味を持って見てくれるだろうか)と多少心配したが、神楽の煌びやかな衣装や迫力ある演技に生徒達は食い入るように見入っていた。何よりも生徒達が、西浦地区の歴史を知ることができたことは、大きな意味があったと考える。長州風鎮神楽を鑑賞する機会を与えていただき感謝申し上げたい。また、長州風鎮神楽社中のメンバーである金子さんと宮本さんが、これを機に、定期的に本校の玄関先に生け花を生けてくださるようになった。玄関先が華やかになったことは勿論であるが、生徒達が金子さんや宮本さんが綺麗な花を生けてくださるのを見て、徐々に大きな声で挨拶や言葉を交わし始めたことは、私にとっても喜ばしいことであった。お二人の無償の愛を、生徒達にしっかりと受け止めてほしいと思うとともに、そのような大人になってほしいと強く願うところである。

効果、その 2

12 月 18 日、華西中学校での公演に多くの参加者があった。保護者、地区の方々、市内・市外の方々の参加もあった。テレビ、新聞等のマスコミ等により報じられ、参加者の口コミもあり、神楽の評判は、県内に一気に広がった。その結果、山口市に神楽チームが 1 チーム結成された。2 月 18 日発会式を、山口市ふるさと伝承館、館長出席の下、行った。長州西ノ京神楽社中と名付けられた。最初の演目、牛若丸と弁慶の口上が作成され、会員募集を行いながら、活動を開始した。

◆苦労した点

文化芸術、神楽による青少年健全育成にあたり、神楽舞い、奏楽[大太鼓、締め太鼓、手拍子の鉦、笛等]の習得に苦労。

石見地方、安芸地方のように山口県は、本格的な里神楽が存在せず、PR、普及に苦労した。従って、口頭では理解されないため、公演の DVD など見せ理解に努めた。

又、神楽の取り組み実績・記録をまとめ、冊子を作成、目で見て理解する方法を試みた。

◆今後の課題・発展の方向性

発展の方向性

防府市おもてなし観光課を主に、関係機関、関係者と協議しながら、神楽による青少年健全育成並びに地域創生に取り組んでいる。防府市から、神楽により地域創生としての事業に取り組むよう、すすめられている。この度、山口県きらめき財団・理事長・山口県知事の支援を受けるべく財団の説明会に参加など、行っている。当財団の審査決定は 5 月 6 日の予定。この審査に受ければ、県推奨のプロジェクトとして、さらに発展が期待される。

◆活動を終えての感想・意見等

マツダ財団からの支援を受けてスタートした、神楽による青少年健全育成事業が、多くの皆様のご理解とご支援により、県下全般に、その活動が広がろうとする兆しを感じられます。更に、創作風鎮神楽会・関係者全員、力を注いでいきたいと存じます。引き続き、ご指導、ご支援のほどよろしく願い申し上げます。

活 動 名	No.31	団 体 名	特定非営利活動法人 まなびデザインラボ
神楽ふれあい教室		地 域	山口県周南市
		代 表 者	理事 小松 範之
		支援金額	25 万円
活動概要	1300 年間継承されてきた神楽を、子どもが山間部の高齢者たちから学ぶ。昇級審査など、子どもが向上心を維持できる仕組みを取り入れる。 目的：次の 5 つである。 1. 郷土愛育成 2. 世代間交流 3. 自己肯定感の向上 4. 体力増進 5. 伝統芸能継承 実施期間：4 月 1 日～3 月 17 日 月 2 回実施。 山口県周南市大字夏切 三作神楽伝承館 参加予定数：子ども 100 名		



◆実施に伴う効果

- ・若者が2名Uターンしてきた。

◆苦勞した点

- ・ 地元以外の子供への告知
まだまだ三作神楽の存在が、市内の子供たちに知られておらず、「三作神楽ってなに？」というところから説明することになった。
- ・ 市役所、学校など公的機関への協力要請
チラシを小中学校で配布したかったが、教育委員会の協賛がないと学校での配布ができないという理由で、できなかった。

◆今後の課題・発展の方向性

公的機関、学校に、三作神楽の重要性、希少性を理解してもらうよう働きかけていきたい。市役所、学校などと協力して、子どもたちが三作神楽を大切に思えるような啓発活動を行っていきたい。

◆活動を終えての感想・意見等

これからも、地域の伝統が引き継がれていくことを望みます。

第33回（2017年度）マツダ財団市民活動支援贈呈式

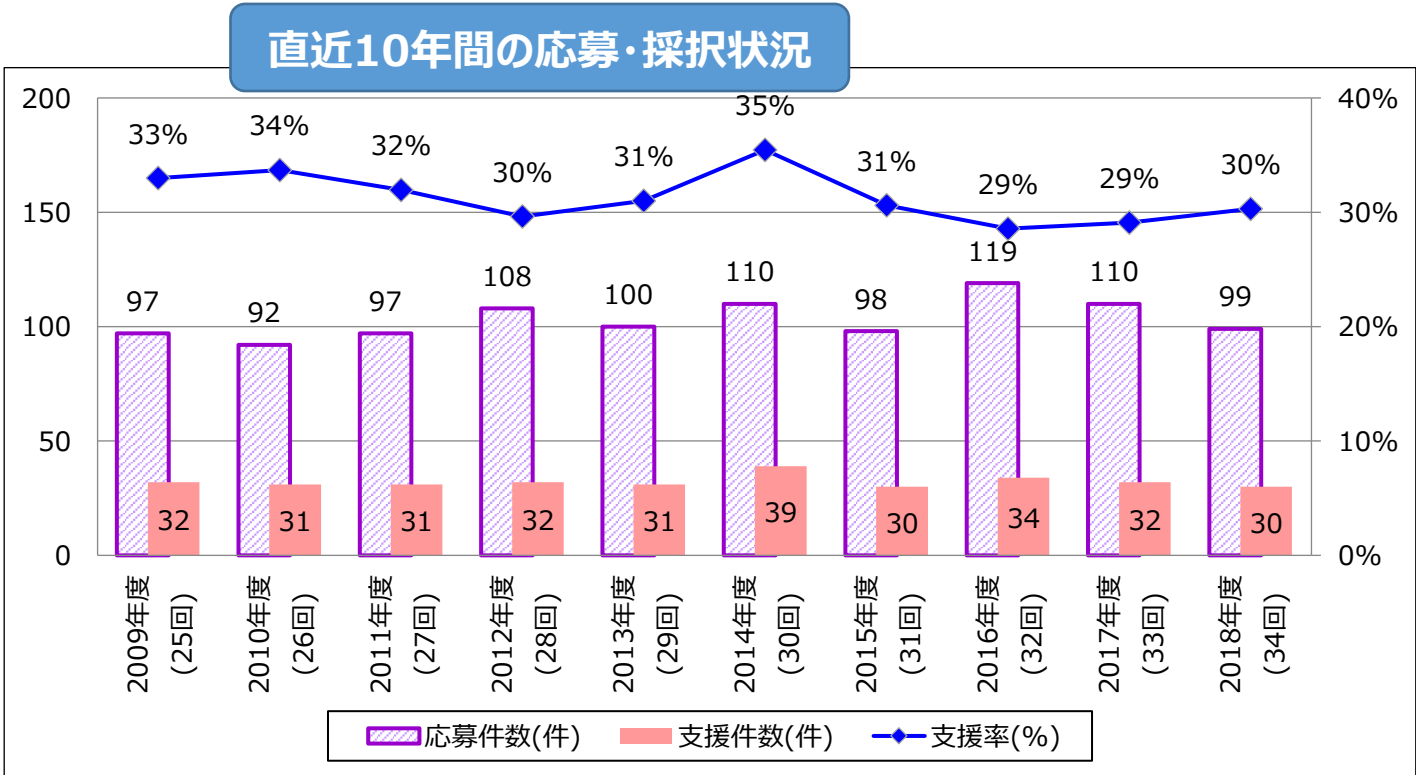
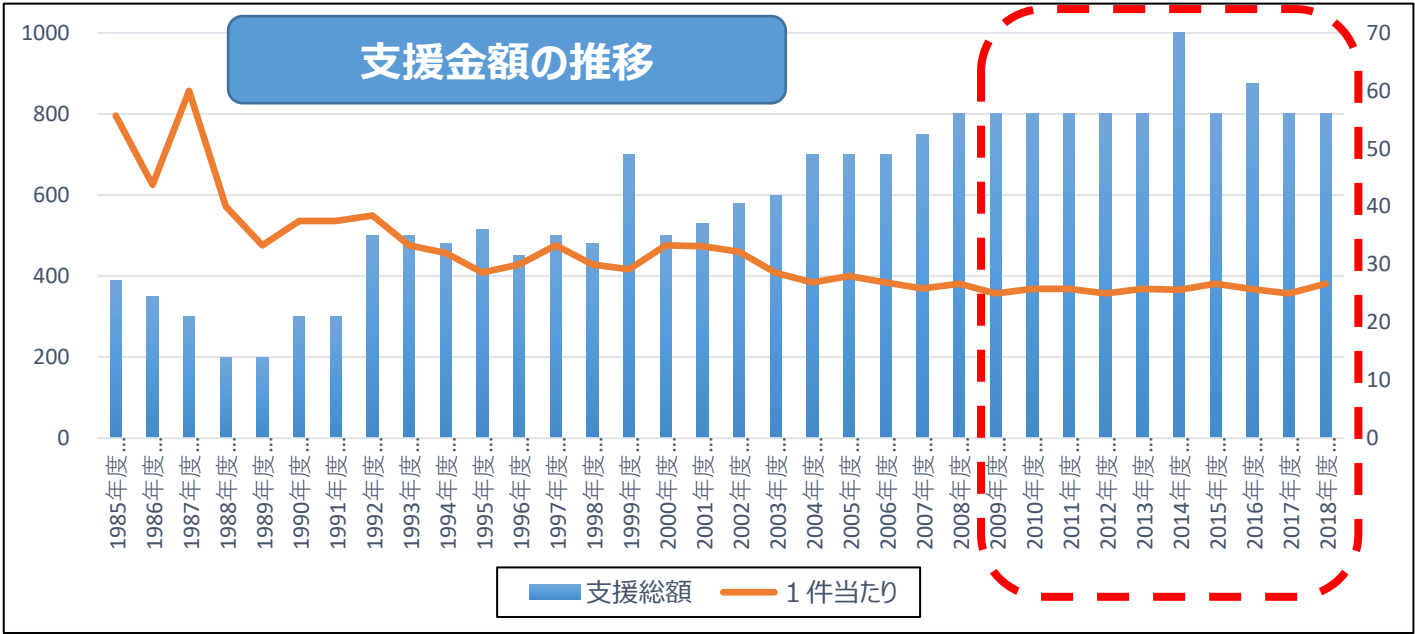
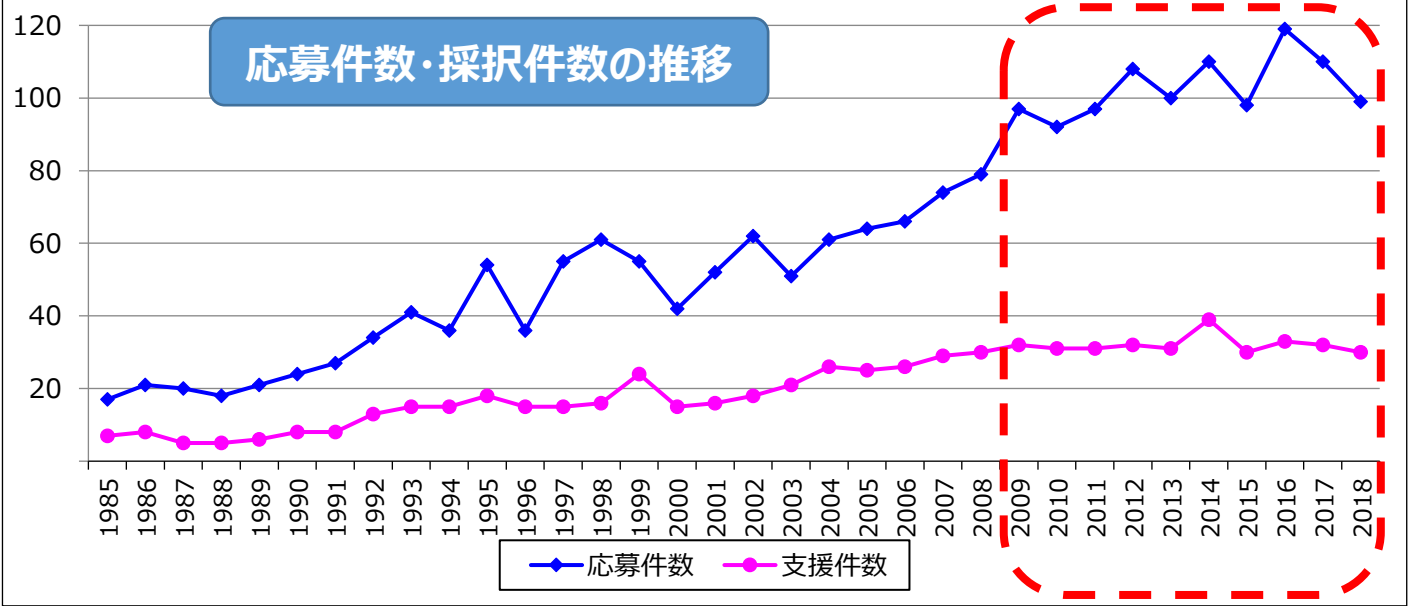


2017年4月19日（水）広島本社に於いて

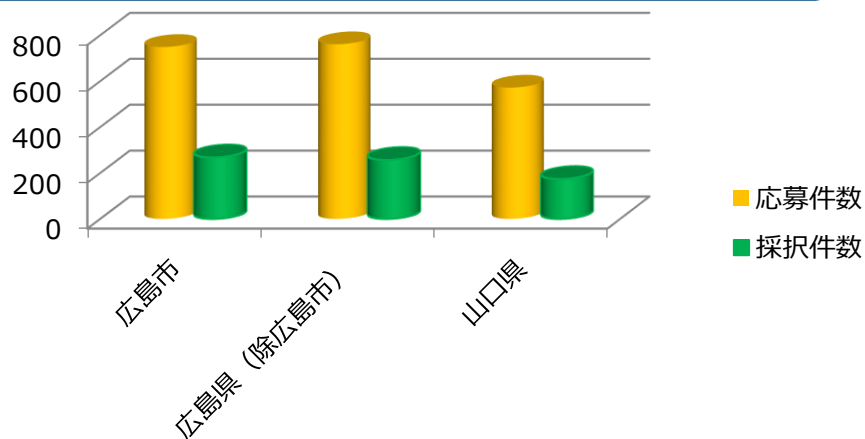


2017年4月25日（火）防府工場に於いて

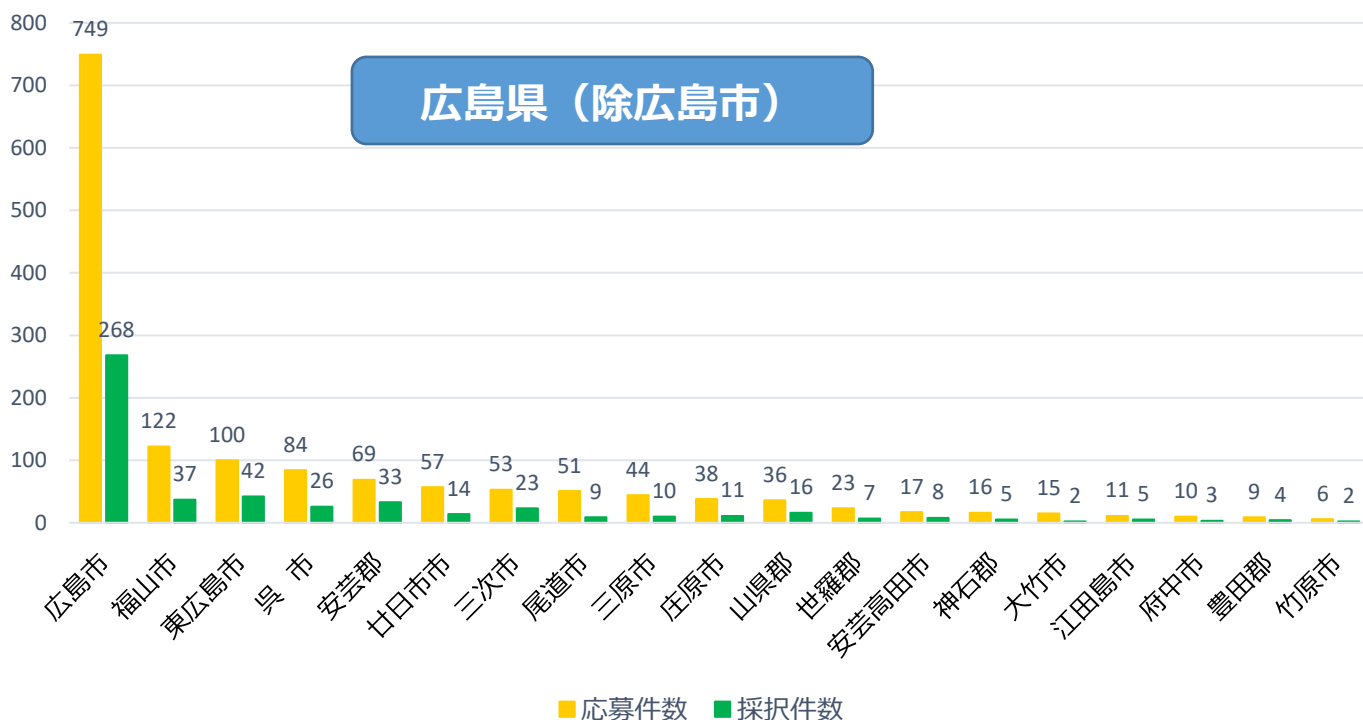
応募＆採択に関するデータ



地域別状況（応募件数、採択件数の累計）



広島県（除広島市）



山口県

